

市内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ

—平成24・25年度—

- 林遺跡第1次発掘調査
- 吉田城址第42次発掘調査
- 吉田城址第45次発掘調査

2016年3月

豊橋市教育委員会

市内埋蔵文化財発掘調査(III)

—平成24・25年度—

はやし い せき

■ 林遺跡第1次発掘調査

よし だ じょう し

■ 吉田城址第42次発掘調査

よし だ じょう し

■ 吉田城址第45次発掘調査

2016年3月

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成25年度に行った林遺跡第1次発掘調査と、平成24・25年度に行った吉田城址第42次・第45次発掘調査の報告書である。掲載遺跡名、所在地、調査期間・面積及び担当については、各調査報告の冒頭に示した。
2. 発掘調査に際して、地元の方々のご理解とご協力をいただいた。また開発事業担当である豊橋市上下水道局下水道整備課、豊橋市教育委員会スポーツ課、豊橋市役所公園緑地課の協力を得た。
3. 報告書の執筆及び編集、遺構・遺物の写真撮影は岩原 剛（豊橋市教育委員会教育部美術博物館文化財センター）が行った。
4. 各調査に使用した座標は、世界測地系に準拠している。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。
5. 遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
6. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図・各種データ等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

総 目 次

■林遺跡第1次発掘調査	1
■吉田城址第42次発掘調査	23
■吉田城址第45次発掘調査	51
報告書抄録	63

はやし い せき
林 遺跡 第1次

発掘調査

例 言

1. 「林遺跡第1次発掘調査」は、平成25年度に豊橋市上下水道局が事業者となって行った貯留施設建設に伴う1次調査の報告書である。所在地、調査期間・面積及び担当については、下記のとおりである。

○豊橋市東脇一丁目地内（林公園内）

○B区：平成25年6月12日～7月12日 ○240㎡

A区：平成25年10月15日～11月3日 ○130㎡ ※計370㎡

○岩原 剛（豊橋市教育委員会美術博物館文化財センター）

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	
1. 遺跡の立地	3
2. 歴史的環境	4
第2章 調査にいたる経過と調査の方法	
1. 調査にいたる経過	6
2. 調査の方法と経過	7
第3章 調査の成果	
1. 遺構	8
2. 遺物	11
第4章 総 括	16

挿 図 目 次

第1図 周辺の地形分類図 (1/45,000)	3	第2図 周辺の遺跡分布図 (1/15,000)	5
第3図 調査区位置図 (1/2,500)	6	第4図 調査区平面図 (1/200)	9
第5図 土坑墓・土坑 平面・断面図、調査区土層図 (1/40・1/80)	10		
第6図 土坑墓・土坑・溝・断割り出土遺物 (1/3)	12		
第7図 A区NR-1 6・7層出土遺物 (1/3)	13		
第8図 B区NR-1 出土遺物 (1/3)	14		

表 目 次

表1 文書事務の流れ	7	表2 林遺跡第1次 遺物観察表	16
------------	---	-----------------	----

写真図版目次

1-1 調査区全景-1 (B区：南西から)	- 2 調査区全景-2 (B区：上から)
2-1 調査区遠景 (B区：南東から)	- 2 A区NR-1 (南から)
- 3 A区NR-1 土層 (南西から)	- 4 B区SD-1・2土層 (南西から)
- 5 B区NR-1 土層 (北東から)	- 6 B区SZ-1-1 (上から)
3-1 B区SZ-1-2 (東から)	- 2 B区SZ-1 遺物出土状況 (南東から)
- 3 出土遺物-1	
4 出土遺物-2	

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1図)

林遺跡は豊橋市東脇1丁目に所在する集落址である。豊橋市は東側が弓張山地、南側が太平洋、西側が三河湾にそれぞれ面し、市域の北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流する。

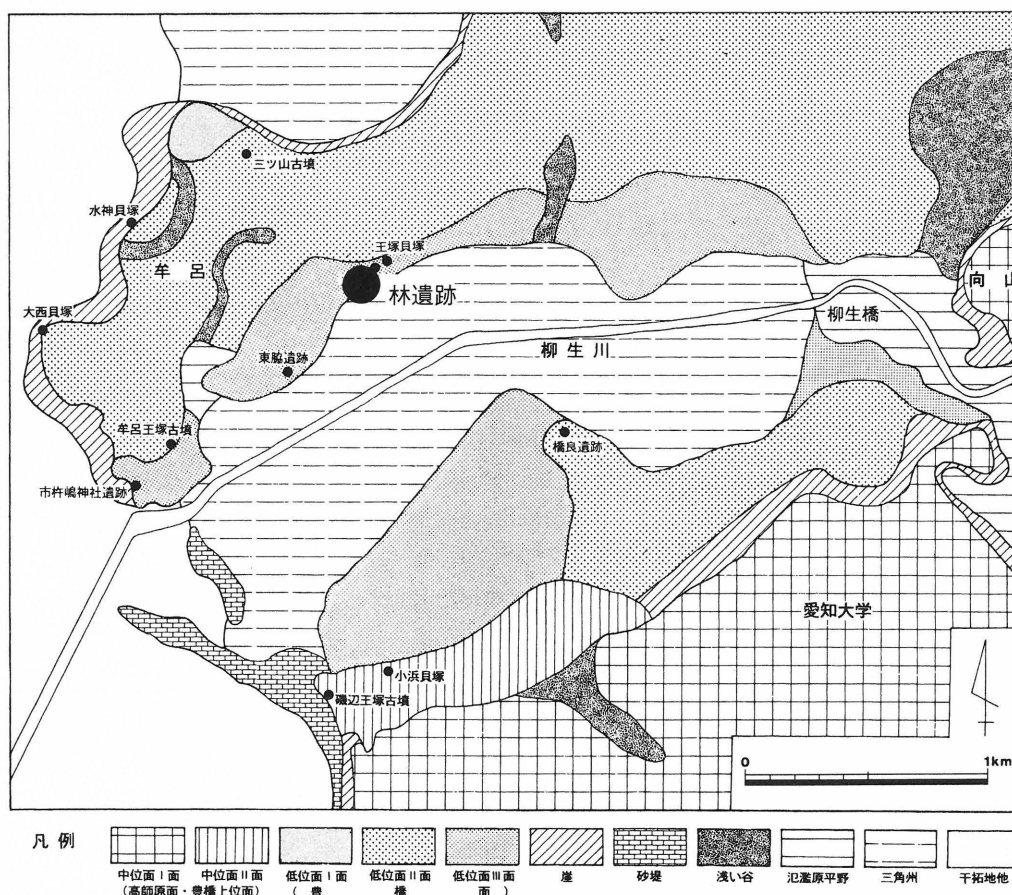
豊川の左岸には、古天竜川と豊川の流れによって形成された河岸段丘が発達し、南から北へ高位面（天伯原面）、中位面（高師原面・豊橋上位面）、低位面（豊橋面）が存在する。低位面（豊橋面）の標高は3～10mで、三河湾に近いところでは北側を豊川、南側を市域の中ほどから三河湾に向かって西流する柳生川によって挟まれ、三河湾に張り出した小さな半島状の地形となる。

低位面（豊橋面）は、形成年代が新しいため浸食は進んでおらず表面は平坦だが、平坦面の連続性からさらに3つの面に分けられている。このなかで最も低い低位面Ⅲは、柳生川に沿ったところで、谷底である南に向かってゆるやかに傾斜している。

林遺跡は、この低位面Ⅲに位置する。調査区は、標高4.3～3.7mの南向きにわずかに下がる平坦な地形の上に所在しており、南に柳生川の流れて谷底平野を望むところである。

参考文献

水野季彦 1995 「1. 遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第27集 外神遺跡』 豊橋市教育委員会



第1図 周辺の地形分類図 (1/45,000)

2. 歴史的環境 (第2図)

林遺跡(1)は、市内有数の遺跡集中地帯である牟呂遺跡群の東端付近に位置している。牟呂遺跡群では区画整理事業に伴い昭和50年代から発掘調査が行われ、現在も遺跡群の北端付近に当たる牟呂坂津地区で継続的に調査が進められている。発掘調査によって、縄文時代から現代までの歴史的動向をたどることができる稀有な地域でもある。ここでは牟呂遺跡群を中心に周辺の歴史的環境を説明する。

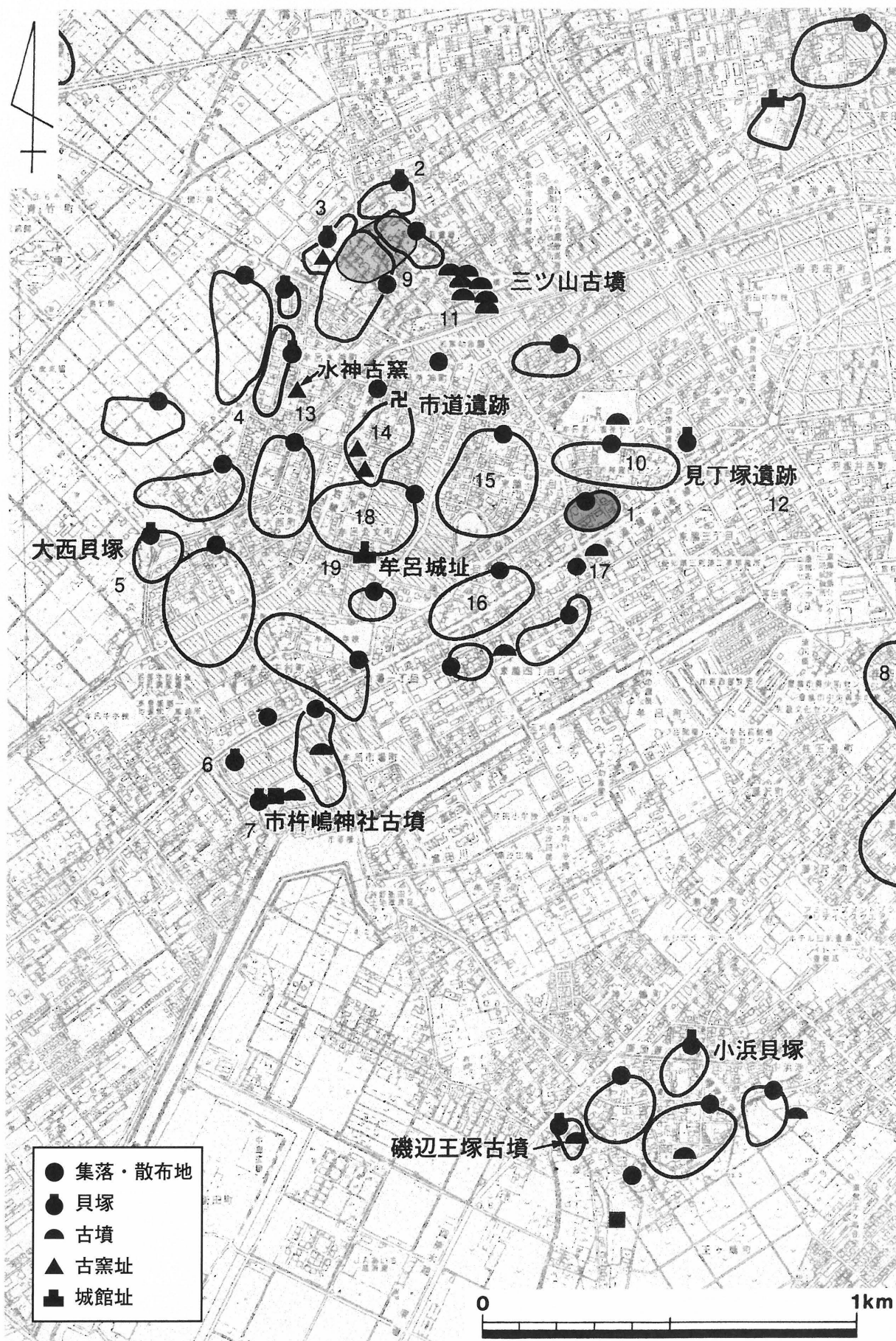
縄文時代 坂津寺貝塚(2)では中期中葉から後期の土器が出土した。晩期には小半島となって三河湾に張り出した低位面(豊橋面)の先端に、内田貝塚(3)、水神貝塚(4)、大西貝塚(5)、さんまい貝塚(6)、市杵嶋神社貝塚(7)などの大規模な貝塚が営まれた。ここでは干し貝加工を専門的に行っていたと推定されている。

弥生時代 橋良遺跡(8)は中期後葉を主体とする環壕集落で、海岸部における拠点集落として知られている。近年、低位面の先端北側に所在する境松・若宮遺跡(9)で環壕集落が検出され、中期後葉に始まり、後期前葉には環壕と内部を分割する区画壕を持った環壕集落になったことが判明した。林遺跡に近い見丁塚遺跡(10)でも中期後葉の方形周溝墓が検出されている。

古墳時代 境松・若宮遺跡では前期初頭に環壕が再度掘り直されており、外来系を多く含む土器多数が出土した。また出現期の方形墳や円墳が検出されるなど、弥生から古墳時代移行期の重要な知見が数多く得られている。市杵嶋神社古墳(7)は三河最古の本格的な古墳であり、三河湾に突き出した低位面の先端に所在する。全長60mほどの前方後方墳で、くびれ部からは底部穿孔を伴う供献土器が出土している。後期になると全長37mの前方後円墳である三ツ山古墳(11)が築かれる。前方部の無袖横穴式石室から鉄製馬具や大刀、鉄鏃、須恵器などの副葬品が出土した。また牟呂王塚古墳は、7世紀初頭の前方後円墳で、明治時代の発掘で優れた金銅装馬具や圭頭大刀などが出土し、現在それらは東京国立博物館に収蔵されている。このほか、海を間近に臨む低位面先端の段丘崖に埴輪専焼窯の若宮古窯(12)、須恵器・埴輪併焼窯の水神古窯(13)が営まれている。

古代 市道遺跡(14)は南側の溝や柵で囲まれた方形区画と、北側の100棟ほどの掘立柱建物群とで構成され、8～11世紀にかけて存続した。北側の掘立柱建物群は倉庫である総柱建物や六角形建物を含むが、典型的な官衙的建物配置をとらないことから豪族居館と推定され、南側方形区画はその氏寺跡と考えられている。「寺」と墨書された灰釉陶器や瓦、瓦塔、仏像の螺髪、和同開珎、鈔帯金具などが出土している。このほか、林遺跡の周辺には市道西遺跡(15)、樂法寺北遺跡(16)、高良社遺跡(17)、見丁塚遺跡で奈良時代を中心に古代の遺物が出土・採集されている。

中世・近世 公文遺跡(18)は、12～13世紀の豪族居館跡である。断面V字形をした大溝が南・西側にL字形に延び、大溝からは山茶碗類とともに多量の牛馬骨が出土した。市道遺跡の豪族居館がさらに中世に継続したものと推定される。牟呂城址(19)は戦国時代の鶴殿氏もしくは牟呂氏の城館址で、現在は土塁の一部がわずかに残るのみである。林遺跡の北にある牟呂八幡社は、文武天皇元年(697年)創立、建久3年(1191年)に鎌倉から八幡神を勧請したと伝える古社で、かつては鎌倉時代の懸仏が伝存していた。参道が南向きに直線的に伸びて林遺跡内にある林公園に至っており、公園内は同社の御旅所になっている。ここは、例大祭に際して相撲神事の会場として使用されるところでもある。



第2図 周辺の遺跡分布図 (1 / 15,000)

第2章 調査にいたる経過と調査の方法

1. 調査にいたる経過 (第3図)

林遺跡は、豊橋市東脇一丁目に所在する都市公園「林公園」内にある。公園の南東60mほどのところには主要幹線道路である県道豊橋港線が通るなど、周辺は住宅密集地が展開する地域である。

近年、集中豪雨による雨水の一時的な処理が問題化している。本市では住宅地の保護を目的に、公園など市の所有地に敷地内や敷地外から流入する雨水を一時的に貯留させ、地下や下水道へ排出させる施設（以下、貯留施設）を順次設置してきた。そうした中で、平成25年度に林公園内にも貯水容量約240tの貯留施設を設置する計画が出され、平成24年度に市上下水道局より相談をうけた市教育委員会では、当該地が古代を中心に縄文時代から近世の集落址である林遺跡が所在し、掘削規模から施工範囲



第3図 調査区位置図 (1/2,500)

内での遺跡の保存が困難なことから、緊急発掘調査による記録保存は避けられないことを伝えた。

そして平成25年4月11日付けで豊橋市上下水道局長から埋蔵文化財発掘の通知（94条通知）が愛知県教育委員会あてに提出され、県からの指示により記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。

2. 調査の方法と経過

発掘調査は、工事計画に合わせて2回に分けて実施した。調査期間は南側のB区が平成25年6月12日～7月12日、北側のA区が平成25年10月15日～11月3日である。調査面積はB区が240㎡、A区が130㎡、合計370㎡である。

B区は林公園の中にあつて、貯留施設本体を設置する部分である。調査では北東から南西に延びる自然の埋没谷を検出したほか、平安時代の土坑墓1基ほかを確認した。埋没谷の埋土は極めて堅く、さらに規模が大きいため想定を超える排土量の扱いに苦慮した。埋没谷は当初は人力で掘削を行い、南側壁面に断ち割りを設けて土層確認を行ったうえで、その後は重機を用いて掘り下げ、完掘した。

A区は林公園の北側の歩道部分で、貯留施設と北にある下水道の本管とをつなぐ管を埋設する箇所である。B区で確認された埋没谷の落ち始めとなる北端付近を確認した。

調査の基本的な方法は、以下のとおりである。

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、順次遺物を取り上げる。
3. 業者委託により基準点を設置し、1/20縮尺の平面図を作成する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、個別に遺構写真を撮影する。
5. 調査区の航空写真を撮影する。

なお、調査に伴う文書事務の流れは下記のとおりである。

表1 文書事務の流れ

文書名	文書番号	日付	作成者	提出先	備考
埋蔵文化財発掘の通知について	25豊上下整第8号	平成25年4月11日	豊橋市水道事業及び下水道事業管理者 上下水道局長	愛知県教育委員会	B区
周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について	25教生第211号	平成25年4月23日	愛知県教育委員会	豊橋市水道事業及び下水道 事業管理者 上下水道局長	B区 発掘調査
埋蔵文化財発掘調査の報告について	25豊教美第235号	平成25年7月19日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長	B区
埋蔵文化財の発掘について (受理通知)	25教生第1526号	平成25年8月29日	愛知県教育委員会教育長	豊橋市教育委員会教育長	B区
発掘調査完了報告票	25豊教美第236号	平成25年7月22日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長	B区
埋蔵文化財発見・認定通知書	25豊教美第236号	平成25年7月30日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県豊橋警察署長	B区
埋蔵文化財発掘調査の報告について	25豊教美第498号	平成25年12月6日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長	A区
埋蔵文化財の発掘について (受理通知)	25教生第2580号	平成25年12月26日	愛知県教育委員会教育長	豊橋市教育委員会教育長	A区
発掘調査完了報告票	25豊教美第506号	平成25年12月10日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長	A区
埋蔵文化財発見・認定通知書	25豊教美第506号	平成25年12月11日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県豊橋警察署長	A区

第3章 調査の成果

1. 遺構

検出された遺構には、平安時代の土坑墓、中世から近世の区画溝、柱穴のほか、自然地形の埋没谷などがある。このうち特徴的なもの、あるいは遺物実測図を掲載したものをとりあげて説明する。なお、調査区は北側の排水管理設部分と南側の貯留施設掘方とで分けて調査を行っており、以下では前者をA区、後者をB区と呼称して説明を行う。

A 土坑墓（第5図）

SZ-1

B区の南東端で検出された。電線の地下埋設管ほかの攪乱によって半分以上が破壊されているが、平面形は隅丸長方形を呈すると思われ、主軸方位は北東-南西方向である。規模は長辺1.65m、短辺0.85m、深さは検出面から0.5mを測る。埋土は暗褐色砂質土である。断面は箱形で木棺が直葬されていたはずだが、人骨はすでに失われ、木棺の痕跡はほとんど認められなかった。中央付近の床面から副葬品がまとまって出土している。

出土遺物は灰釉陶器の碗（第6図1～4）、皿（5）、壺（6）が土坑の床面直上から出土したほか、埋土や攪乱内から木棺に使用した鉄釘（7～9）、刀子（10～12）、鉄製紡錘車（13）が出土しており、遺構の時期は平安時代後期の10世紀後葉から11世紀前葉である。

B. 土坑（第5図）

SK-1

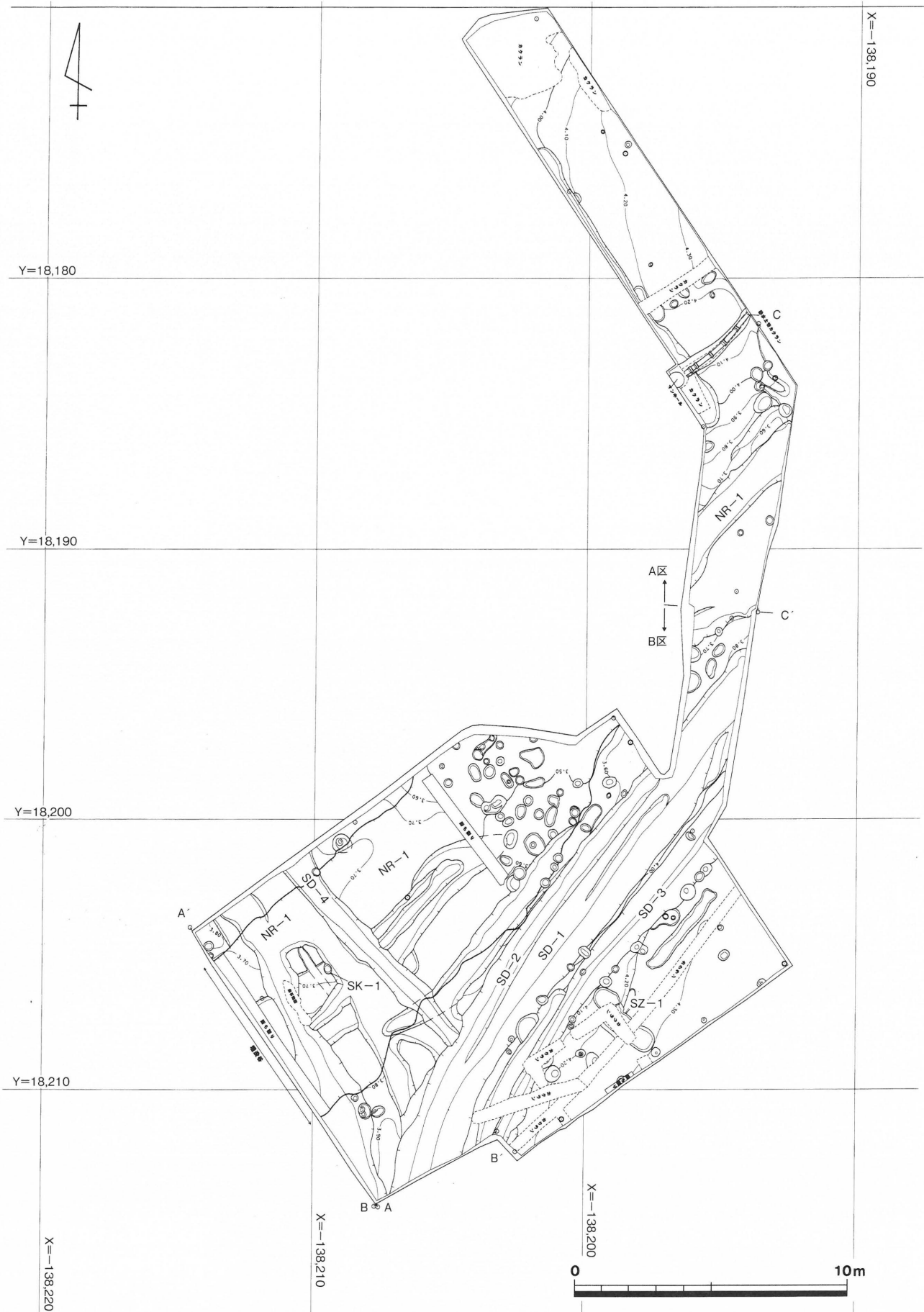
B区の西側、埋没谷の埋土に掘りこまれた柱穴と考えられる小ピットである。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.4m、短径0.2m、深さ0.45mを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には灰釉陶器の碗（14・15）があり、遺構の時期は平安時代後期の11世紀である。

C. 溝（第4図）

SD-1・2

B区を北東から南西にかけて横断する溝である。東側がSD-1、西側がSD-2で、併行して延びた後南側で重複しており、同一の溝が掘り直された状況を示すものと考えられる。断面や切り合い関係から、SD-1よりもSD-2の方が新しい。検出長は最大24m、幅はSD-1が1.8m以上、SD-2が1.0m、深さは土層断面図からいずれも0.6mである。断面は浅い台形を呈し、屋敷地の区画溝であろう。埋土はSD-1が茶褐色砂質土、SD-2が灰褐色砂質土である。

出土遺物はSD-1が土師器のくの字状口縁鍋（第6図16）、古瀬戸の平碗（17）などがあり、SD-1・2いずれか分別不明のものとして陶器の壺（18）がある。遺構の時期は戦国時代から近世である。



第4図 調査区平面図 (1/200)

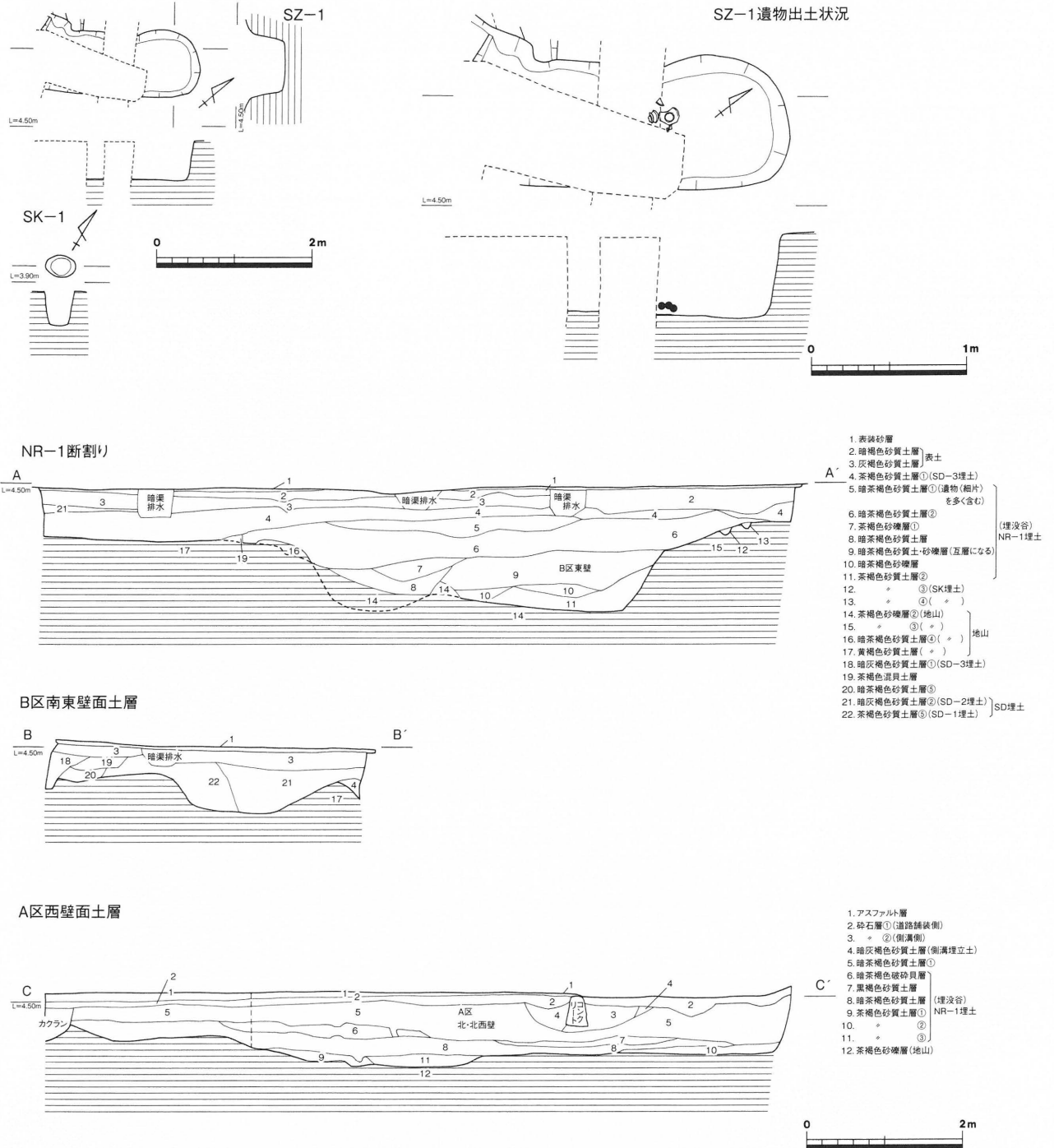
SD-3

B区で検出された溝で、SD-1・2に並行しており、これらと同様の溝だろう。規模は検出長16m、幅1.4m、深さ0.5mを測り、断面形は台形を呈する。埋土は灰褐色砂質土で、SD-2に近似している。屋敷地の区画溝と考えられ、SD-2との間の空間は通路と考えられる。

出土遺物には磁器の色絵皿（第6図19）があり、遺構の時期は近世である。

SD-4

B区で検出された溝で、SD-1・2とは直角する方向に延びてそれに東端が切られている。規模は



第5図 土坑墓・土坑 平面・断面図、調査区土層図 (1/40・1/80)

検出長8.4m、幅1.0m、深さ0.5mを測り、断面形は台形を呈する。埋土は混土貝層と暗茶褐色砂質土で、溝の中央にはほぼ純貝層に近い混土貝層が分布していた。何らかの区画溝と考えられ、SD-2に切られて途切れることからそれと同時期の遺構と考えられる。

出土遺物には磁器の丸碗（第6図20）があり、遺構の時期は近世である。

D. 埋没谷（第4・5図）

NR-1

A区からB区にかけて、北東から南西方向に延びる谷である。A区は谷の落ち始めに近いのでか底面まで人力で掘削することができたが、埋土が極めて堅く土量が多いため、B区では断割り以外は重機を使用して掘削している。規模は検出長30m、幅は北西壁面で7.0m、深さはB区南西壁の土層断面（第5図）から1.2mを測る。埋土は茶褐色または暗茶褐色砂質土または砂礫層で、極めて堅く締まっており人力での掘削は困難を極めた。後世の遺構はすべて埋土の上面から掘りこまれたものである。

B区南西壁（第5図NR-1断割り）では、5～11層までがNR-1の埋土である。一方、A区では西壁（第5図）で確認された6～11層が埋土である。A区西壁の6・7層から遺物が集中して出土しており、ここがB区5～7層に対応する。

出土遺物には古代の須恵器、灰釉陶器、山茶碗類、土師器の清郷型甕があり、細片が極めて多く、いずれも周囲の遺跡から流れ込んだものと考えられる。前述のように埋土上部の層から集中して出土しており、古代に谷が埋没しながら、ある時期に集中して遺物が流れ込んだ状況がうかがえる。

2. 遺物

A. 土坑墓

SZ-1（第6図1～13）

1～6は灰釉陶器である。1～4は碗、5は皿。6は壺で、口縁部は強く外反し肩には一条の沈線がめぐる。体部はやや下位に最大径を持つ。底部は平坦で高台は無く、回転ヘラ切り調整される。外面には灰釉が丁寧に掛けられている。いずれも二川窯産と考えられ、H-72号窯式に比定される。

7～9は鉄釘である。7はほぼ完形で、頭部は直角に折り曲げられて直交方向に木質が付着する。また長軸に沿ってわずかに木質が付着しており、頭部のそれとは方向が異なる。8・9は鉄釘の破片で、8には木質が付着している。鉄釘は木棺に使用されたものであり、7は木質の状況から箱形の木棺の小口面に使用されたことが分かる。

10～12は鉄製の刀子である。接合しないため個別に図化したのが、恐らく同一品であろう。断面形は薄い二等辺三角形を呈し、10は切先であるが棟側が尖らずに剣のような形状を呈する。12は刀部関がわずかに両関となり、茎には木質が認められる。

13は鉄製紡錘車である。円板・棒状部いずれも鉄製で、円板に穴をあけて棒状部を差し込んでいる。

B. 土坑

SK-1 (第6図14・15)

14・15は灰釉陶器で、14は深碗、15は碗である。いずれもH-72号窯式に比定される。

C. 溝

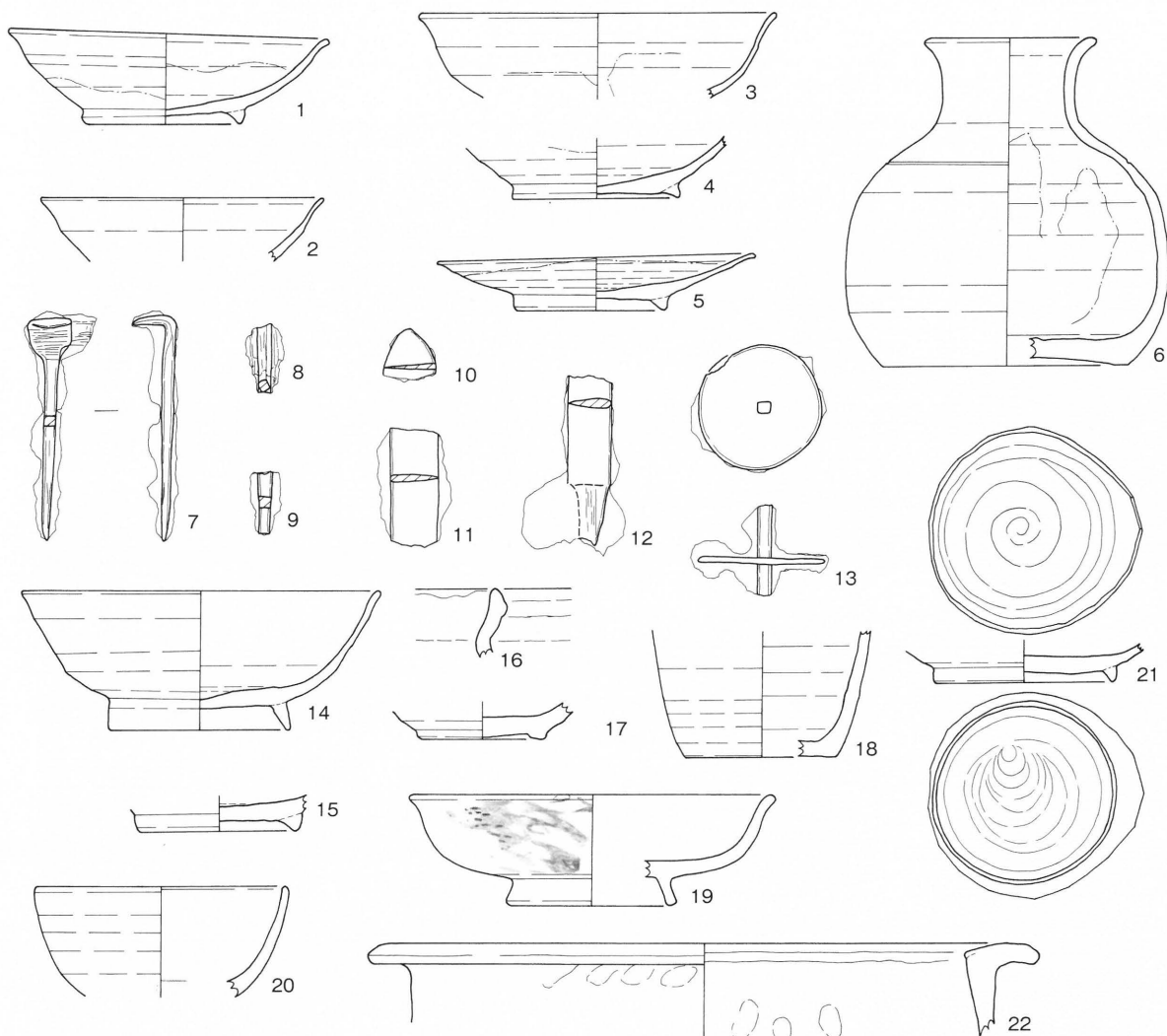
SD-1 (第6図16・17)

16は土師器のくの字状口縁鍋の口縁部片である。17は古瀬戸・平碗の底部で、内面には灰釉が見られる。古瀬戸後期IV段階のもの。

SD-1・2 (第6図18)

18は近世陶器の壺である。外面は鉄釉(柿釉)が施され、底部は回転ヘラ削り調整である。

SD-3 (第6図19)



1~13: SZ-1 14・15: SK-1 16・17: SD-1
 18: SD-1・2 19: SD-3 20: SD-4 21・22: 断割り(NR-1)

第6図 土坑墓・土坑・溝・断割り出土遺物 (1/3)

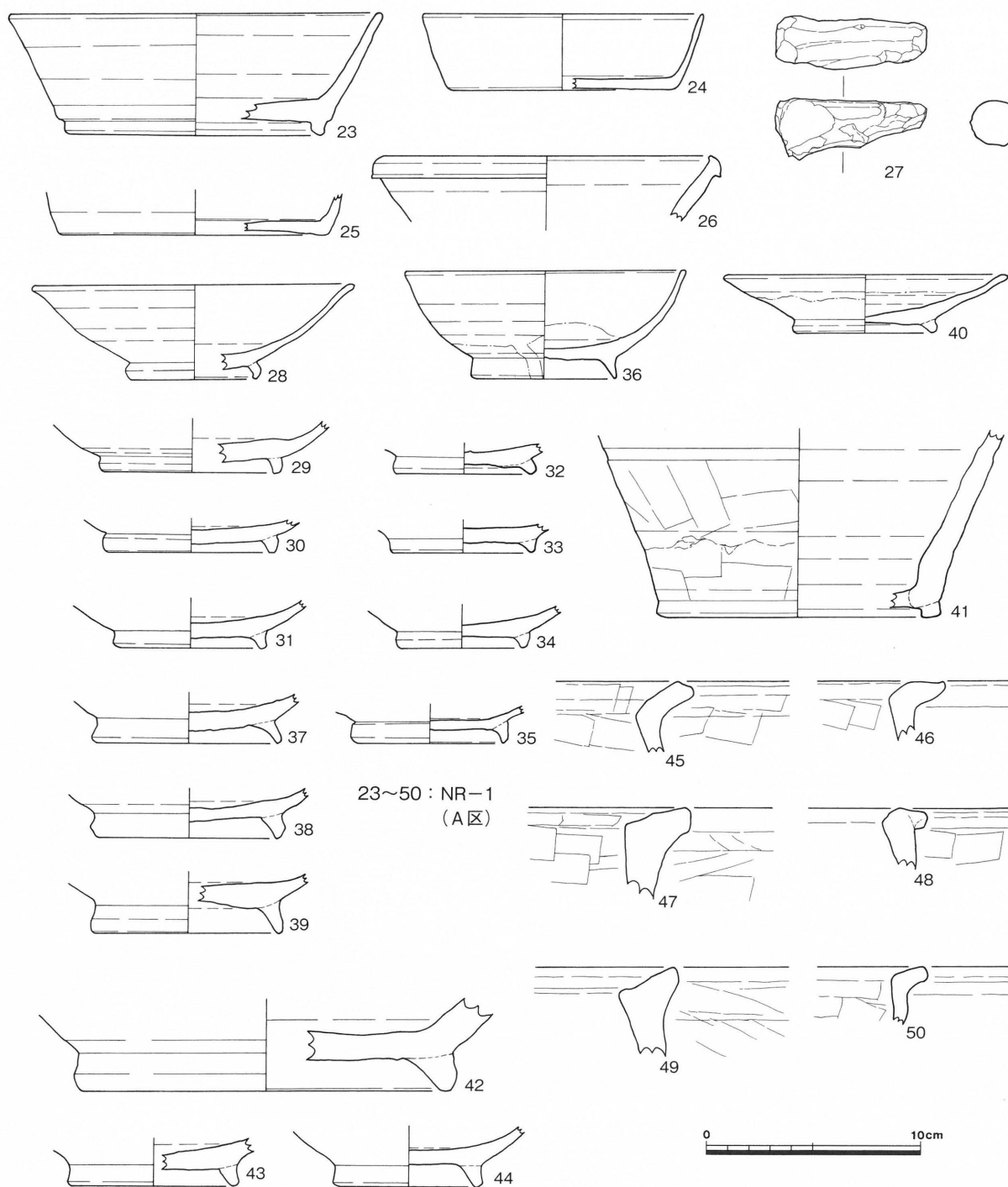
19は磁器の色絵皿で、外面に赤色と暗褐色の色絵が見られる。

SD-4 (第6図20)

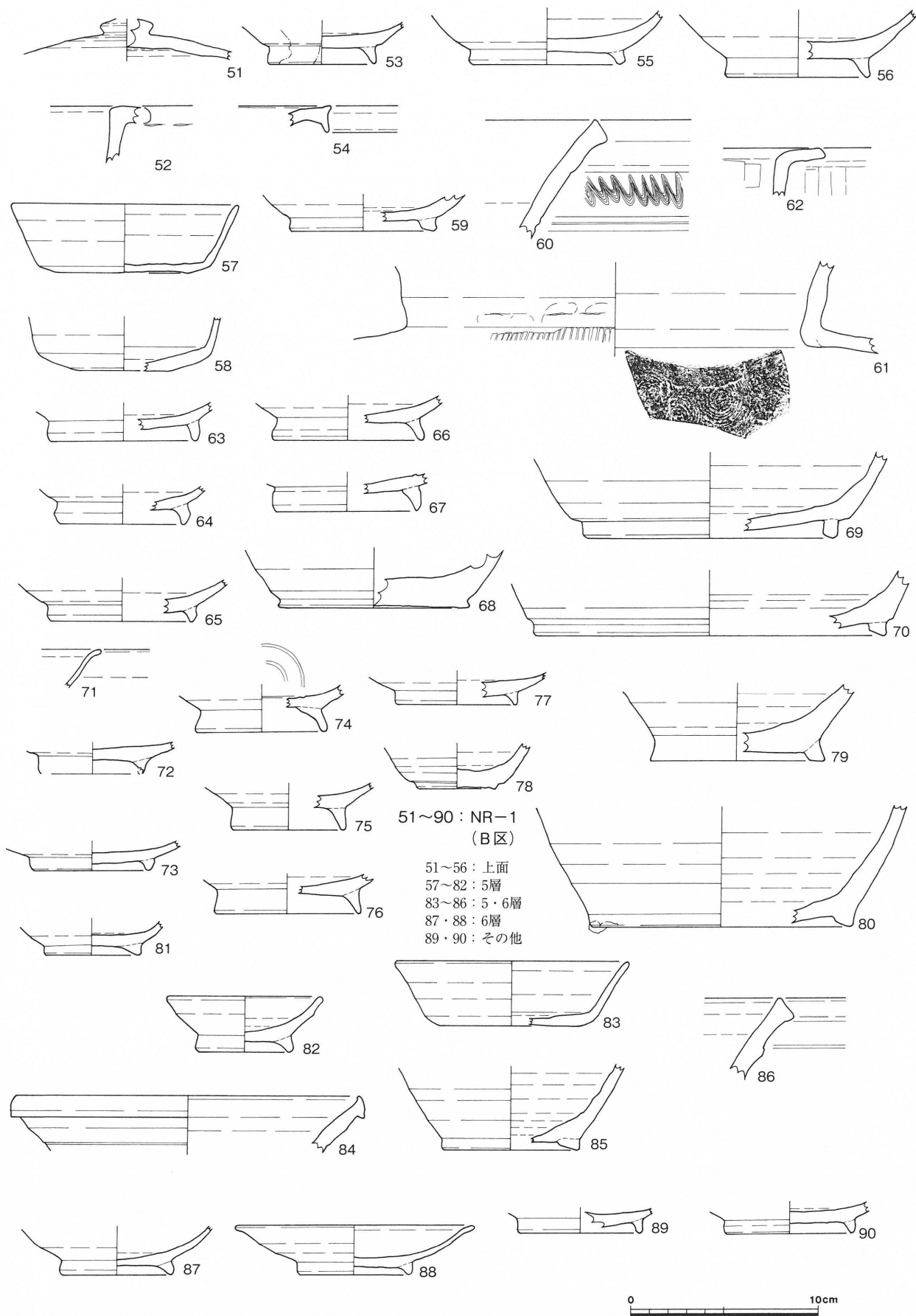
20は磁器の丸碗で、外面は青磁釉、内面は透明釉に呉須絵が見られる。近世のもの。

断割り (第6図21・22)

B区の南西壁に沿って設けた断割りから出土した遺物で、基本的にNR-1に伴うものである。21は



第7図 A区NR-1 6・7層出土遺物 (1/3)



第8図 B区NR-1 出土遺物 (1/3)

灰釉陶器の碗で、体部が欠損して円形を呈したいわゆる土製（陶製）円盤だろう。H-72号窯式に比定される。22は土師器の三河型甕で、外面はナデ調整される。8世紀のもの。

D. 埋没谷

NR-1（第7図23～第8図90）

23～50はA区、51～90はB区で出土したものである。

A区出土遺物は、第5図のA区西壁面土層断面図の6・7層に該当するところから出土している。23～27はいずれも湖西窯産の須恵器である。23は有台坏、24・25は無台坏。26は広口壺の口縁部、27は陶馬の脚の可能性があるが、接合部内側がナデ調整されるため、把手としておく。23～25は8世紀後葉、26は古く7世紀のものである。28～41は灰釉陶器である。28～35は碗、36は深碗、37～39は中碗で高台が高く径が大きなものである。42～44は渥美・湖西型の山茶碗類である。42は片口鉢で2型式、43・44は碗で1型式に比定される。45～50は土師器の甕である。このうち45～49はいわゆる清郷型甕、50は産地不詳である。

B区出土遺物は、第5図NR-1断割り土層図の5～7層に該当するところからおもに出土している。ここでは把握可能な限り層序に分けて遺物を取り上げている。

51～56はNR-1の検出時である最上面から出土したものである。51は湖西窯産須恵器の蓋で8世紀後葉のもの。52は同時期の土師器の甕でいわゆる三河型甕。53は灰釉陶器の中碗、54は灰釉陶器の壺類。55・56は渥美・湖西型山茶碗である。

57～82は5層から出土した。57～60は須恵器で、57・58は無台坏、59は壺の底部、60・61は甕の口縁部及び頸部付近である60は古墳時代終末期の7世紀、57・59は8世紀後葉のもの。湖西窯産が主体となるが、58は二段底となり猿投窯産と考えられる。62は土師器の三河型甕で、口縁部は外側にほぼ直角に屈曲する。奈良時代のもの。63～81は灰釉陶器で、63～70はO-53号窯式、71～80はH-72号窯式、81は百代寺窯式に並行する小谷窯期に比定される。63～65は碗、66・67は中碗、68～78は壺類で68は手付瓶、69・70は平瓶の底部である。71～73は碗、74～76は高い高台を有した深碗で、74は内面の見込みに同心円となる二重の沈線が見られる。77は碗または皿、78～80は壺類の底部で、79・80は長頸壺と考えられる。81は小型の碗の底部で、高台はかなり崩れた三角高台である。82は山茶碗に含めたが、灰釉陶器の小谷窯期にさかのぼる可能性がある。小碗である。

83～86は5・6層から出土した。いずれも須恵器である。83は猿投窯産と考えられる無台坏。84は7世紀の広口壺で26と同一個体の可能性がある。85は長頸壺の底部。86は甕の口縁部端で、湖西窯産。7世紀のものと思われる。

87・88は6層から出土した。いずれも灰釉陶器で、H-72号窯式期に比定される。87は碗、88は皿。

89・90は、出土層位不明のものである灰釉陶器の碗で、90は内面に使用痕が認められる。いずれもH-72号窯式期に比定される。

表2 林遺跡第1次 遺物観察表

No	地区名	遺構	種類	器種	口径	器高	底径	その他	残存率%	胎土	焼成	色調	調整等	産地・時期	時期	備考
1	B区	SZ-1	灰釉陶器	碗	12.9	3.8	6.5		90	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
2	B区	SZ-1	灰釉陶器	小碗	11.4	(2.5)			5	密	良好	淡灰色	回転ナデ	二川窯産	H-72	
3	B区	SZ-1	灰釉陶器	深碗	14.4	(3.4)			5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
4	B区	SZ-1	灰釉陶器	碗		(2.4)	6.7		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
5	B区	SZ-1	灰釉陶器	皿	12.8	2.3	6.2		80	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
6	B区	SZ-1	灰釉陶器	壺	6.8~7.4	13.2	9.8	胴径13.0	50	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、外面の肩に一乗の沈線、内外面に灰釉	二川窯産か	H-72	
7	B区	SZ-1	鉄器	鉄釘	長さ9.0、頭部幅最大1.8、体部幅最大0.6、重さ17.2				100				頭部を扁平につくり、折り曲げ。頭部に横方向の木質が良好に遺存、体部にも縦方向の木質がわずかに遺存			木棺に使用
8	B区	SZ-1	鉄器	鉄釘	長さ(2.8)、幅0.6								体部片。縦方向の木質が良好に遺存			木棺に使用
9	B区	SZ-1	鉄器	鉄釘	長さ(1.9)、幅0.5								体部片			木棺に使用
10	B区	SZ-1	鉄器	刀子	長さ(2.0)、幅(2.1)、厚さ0.3								切先片			副葬品
11	B区	SZ-1	鉄器	刀子	長さ(1.5)、幅1.9、厚さ0.3								刃部片			副葬品
12	B区	SZ-1	鉄器	刀子	全長(6.8)、刃部長(4.5)、同幅1.8、同厚さ0.3、基部長(2.3)								刃部及び基部片。基部にわずかに木質が遺存			副葬品
13	B区	SZ-1	鉄器	紡錘車	長さ(3.6)、径5.0											副葬品
14	B区	SK-1	灰釉陶器	深碗	14.4	5.6	7.3		50	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、貼り付け高台、内外面に灰釉		H-72	
15	B区	SK-1	灰釉陶器	碗		(1.4)	6.7		10	密	やや不良	白灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台		H-72	
16	B区	SD-1	土師器	くの字状口縁鍋		(2.7)			1	密	良好	淡褐色	ヨコナデ			
17	B区	SD-1	陶器	平碗		(1.5)	5.1		10	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、内面に灰釉			
18	B区	SD-1・2	陶器	壺		(5.1)	6.2		10	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、体部外面に鉄釉(柿釉)		近世	
19	B区	SD-3	磁器	皿	14.7	4.5	6.8		30	密	良好	淡灰白色	外面に赤色と暗褐色の色絵、透明釉			色絵皿
20	B区	SD-4	磁器	丸碗		(4.4)	10.2		25	密	良好	淡灰白色	外面に青磁釉、内面に呉須絵・透明釉			
21	B区	断割り	灰釉陶器	碗		(1.6)	7.3		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台		H-72	意図的な打ち欠き、土製円板か
22	B区	断割り	土師器	甕	26.9	(3.8)			2	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ		8世紀後葉	三河型甕
23	A区	NR-1 6・7層	須恵器	有台坏	17.6	5.8	12.3		70	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台、体部外面の下位に1条の浅い沈線	湖西窯産	8世紀後葉	
24	A区	NR-1 6・7層	須恵器	無台坏	13.2	(3.6)	10.8		20	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産?	8世紀後葉	
25	A区	NR-1 6・7層	須恵器	無台坏		(1.9)	12.8		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀後葉	
26	A区	NR-1 6・7層	須恵器	広口壺	16.4	(3.0)			1	密	良好	灰色	回転ナデ、内面降灰		6世紀	
27	A区	NR-1 6・7層	須恵器	把手	縦(2.9)横7.1、中央部径2.1~2.3				?	密	良好	淡灰色	外面にヘラケズリ状の強いナデ、内面ナデ	湖西窯産		
28	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗	15.2	4.5	6.4		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部調整不明、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
29	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗		(2.4)	8.6		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台、内面に灰釉	二川窯産	O-53	
30	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗		(1.5)	8.3		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	二川窯産		
31	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗		(2.2)	7.2		40	密	やや不良	淡褐色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
32	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗		(1.4)	6.7		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
33	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗		(1.4)	6.8		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
34	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗		(2.0)	6.3		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
35	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	碗		(1.7)	7.4		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
36	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	深碗	13.2	5.1	6.8		40	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
37	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	中碗		(2.3)	8.9		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台、外面に灰釉、内面に重ね焼き痕	二川窯産	O-53	
38	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	中碗		(2.3)	9.2		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
39	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	中碗		(2.8)	9.1		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
40	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	皿	13.4	2.75	6.8		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
41	A区	NR-1 6・7層	灰釉陶器	長頸壺		(8.7)	13.4		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部外面下位に板ナデ、貼り付け高台		H-72	
42	A区	NR-1 6・7層	山茶碗	片口鉢		(4.3)	18.0		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部外面下位回転ヘラケズリ、底部未調整、貼り付け高台	渥美・湖西型	2型式	
43	A区	NR-1 6・7層	山茶碗	碗		(2.2)	8.0		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	渥美・湖西型	1型式	

※単位はcmまたはg、()は残存値

No	地区名	遺構	種類	器種	口径	器高	底径	その他	残存率%	胎土	焼成	色調	調整等	産地・時期	時期	備考
44	A区	NR-1 6・7層	山茶碗	碗		(2.8)	7.0		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	渥美・湖西型	1型式	
45	A区	NR-1 6・7層	土師器	清輝型甕		(3.3)			1	密	良好	橙褐色	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ		清輝型1～2	
46	A区	NR-1 6・7層	土師器	清輝型甕		(2.7)			1	密	良好	茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面板ナデ		清輝型2	
47	A区	NR-1 6・7層	土師器	清輝型甕		(4.3)			1	密	良好	橙褐色	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ		清輝型2	
48	A区	NR-1 上面	土師器	清輝型甕		(2.9)			1	密	良好	橙褐色	口縁部～体部内面ヨコナデ、体部外面板ナデ		清輝型3	
49	A区	NR-1 上面	土師器	清輝型甕		(4.3)	1		1	密	良好	淡褐色	口縁部～体部内面ヨコナデ、体部外面板ナデ		清輝型4	
50	A区	NR-1 上面	土師器	甕		(2.7)			1	密	良好	橙褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面板ナデ、外面摩滅	産地不詳		
51	B区	NR-1 上面	須恵器	蓋		(2.2)		つまみ径2.8	50	密	良好	淡灰色	回転ナデ、上面回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀後葉	
52	B区	NR-1 上面	土師器	甕		(3.0)			1	密	良好	淡褐色	ヨコナデ			三河型甕
53	B区	NR-1 上面	灰釉陶器	中碗		(2.3)	5.8		25	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	O-53	
54	B区	NR-1 上面	灰釉陶器	壺		(1.4)			1	密	良好	暗紫灰	回転ナデ、灰釉			
55	B区	NR-1 上面	山茶碗	碗		(2.9)	8.4		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、貼り付け高台、内面に使用痕	渥美・湖西型	1型式	
56	B区	NR-1 上面	山茶碗	碗		(3.6)	7.8		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、貼り付け高台、内面に灰釉	渥美・湖西型	1型式	
57	B区	NR-1 5層	須恵器	無台坏	12.2	3.7	9.1		20	密	良好	淡褐色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	猿投窯産	8世紀後葉	
58	B区	NR-1 5層	須恵器	無台坏		(2.9)	5.8		10	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	猿投窯産	8世紀後葉	二段底
59	B区	NR-1 5層	須恵器	壺		(1.9)	7.9		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台		8世紀後葉	
60	B区	NR-1 5層	須恵器	甕		(6.4)			1	密	良好	淡灰色	回転ナデ、外面に波状文と沈線	湖西窯産	7世紀	
61	B区	NR-1 5層	須恵器	甕		(4.9)		頸部径22.3	3	密	良好	灰赤	回転ナデ、体部内面に当て具痕、外面に平行タタキ	湖西窯産		
62	B区	NR-1 5層	土師器	甕		(2.6)			1	密	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部内外面板ナデ			三河型甕
63	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗		(2.1)	8.2		5	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
64	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗		(2.0)	7.3		3	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
65	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗		(2.3)	8.0		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
66	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	中碗		(2.4)	8.2		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
67	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	中碗		(2.0)	8.0		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	O-53	
68	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	手付瓶		(3.1)	10.3		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部下位～底部回転ヘラケズリ		O-53	
69	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	平瓶		(4.6)	13.7		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部下位～底部回転ヘラケズリ		O-53	
70	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	平瓶		(3.5)	19.0		1	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部下位～底部回転ヘラケズリ		O-53	
71	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗		(2.1)			3	密	良好	淡灰色	回転ナデ、内面に灰釉		H-72	
72	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗		(1.7)	5.7		10	密	やや不良	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切りか摩滅、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
73	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗		(1.6)	6.6		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
74	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	深碗		(2.5)	7.1		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、内面見込みに2条×2重の圈線、内面に灰釉	二川窯産	H-72	
75	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	深碗		(2.5)	6.2		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
76	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	深碗		(2.1)	7.9		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
77	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗or皿		(1.8)	6.6		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
78	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	壺		(2.4)	4.3		25	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、体部下位回転ヘラケズリ、内面に灰釉		H-72	
79	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	長頸壺		(4.1)	9.1		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部外面下位回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、貼り付け高台		H-72	
80	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	長頸壺		(6.6)	14.2		5	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、体部外面下位回転ヘラケズリ、貼り付け高台		H-72	
81	B区	NR-1 5層	灰釉陶器	碗		(1.8)	5.2		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り	二川窯産		小谷古窯か?
82	B区	NR-1 5層	山茶碗	小碗	8.4	3.1	5.3		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台	渥美・湖西型	1型式	
83	B区	NR-1 5・6層	須恵器	無台坏		(3.5)	7.5		50	密	良好	灰褐色	回転ナデ、底部回転糸切り	猿投窯産	8世紀後葉	
84	B区	NR-1 5・6層	須恵器	広口壺	19.0	(3.0)			1	密	良好	灰色	回転ナデ		6世紀	26と同一個体か
85	B区	NR-1 5・6層	須恵器	長頸壺		(4.6)	7.4		10	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、体部外面下位回転ヘラケズリ、貼り付け高台	猿投窯産	8世紀後葉	
86	B区	NR-1 5・6層	須恵器	甕		(4.3)			1	密	良好	淡灰色	回転ナデ、外面に沈線	湖西窯産	7世紀	
87	B区	NR-1 その他	灰釉陶器	碗		(2.6)	6.1		30	密	やや不良	淡灰白色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産		
88	B区	NR-1 その他	灰釉陶器	皿	13.0	2.7	6.2		50	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産		
89	B区	NR-1 その他	灰釉陶器	碗		(1.3)	6.7		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
90	B区	NR-1 その他	灰釉陶器	碗		(1.7)	7.0		25	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	

※単位はcmまたはg、()は残存値

第4章 総括

今回の調査は、豊橋市教育委員会が行う林遺跡の第1次の発掘調査である。現地は牟呂八幡宮のお旅所である林公園の中にあり、公園内にあたる調査区の東側には、参道の並木が現存している。

牟呂八幡宮は、建久2年（1191）に鎌倉から八幡神を勧請したと伝わり、幕末のええじゃない騒動の発端にもなった市内屈指の古社で、戦前には鎌倉時代の懸仏が伝存していた。従って、今回の調査では八幡宮に関わる遺構の検出が予想された。

しかし、調査を進めたところ、出土遺物の大半は八幡神の勧請をさかのぼる10～12世紀のものが主体であり、また検出された戦国・江戸時代の区画溝は、方向が参道の方位とまったく合わないことが判明した。つまり、今回の調査成果を牟呂八幡宮に関わらせて評価することは極めて難しい。

調査区の大半が埋没谷の中に相当するため、出土遺物の内容に比較して遺構の状況は不明瞭と言わざるを得ないが、調査区の周囲に10～12世紀の遺構群が濃密に存在することは十分推定できる。林遺跡を含め、市道西遺跡や行合遺跡、楽法寺北遺跡など、周辺には古代の遺跡が存在しており、調査が進んでいないためその様相や性質ははっきりとは分かっていない。遺跡の存続時期を含めて、今回の調査成果が周辺の遺跡を評価するうえでの糸口になることが期待される。

また、土坑墓S Z - 1は付近の集落に居住した有力層の存在を示すものとして重要である。副葬品に灰釉陶器の碗や壺だけでなく、刀子と鉄製紡錘車など鉄器を持ち、釘を使用した木棺墓であったなど、当地方では調査事例が少ない古代の土坑墓の構造や性質を探るうえでも貴重な知見となった。

今回の調査だけで付近に集中する古代の遺跡をすべて評価することはできないが、ひとつの解釈として、遺跡の南に柳生川の河口部を臨む立地から、柳生川の河口部に発達した港とのかかわりが想定される。そして牟呂遺跡群を代表する古代の遺跡である市道遺跡を中心とする付近の古代の世界をいかに評価すべきか、今後周辺部の調査が進むことによって解明される事実は多いことと思われる。調査の蓄積によりさらなる評価が進み、より正しい解釈がなされることを課題としておきたい。



1. 調査区全景-1 (B区: 南西から)



2. 調査区全景-2 (B区: 上から)



1. 調査区遠景 (B区：南東から)



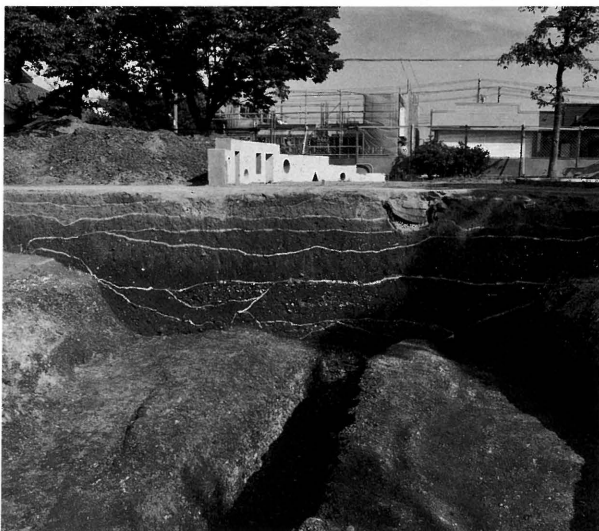
2. A区NR-1 (南から)



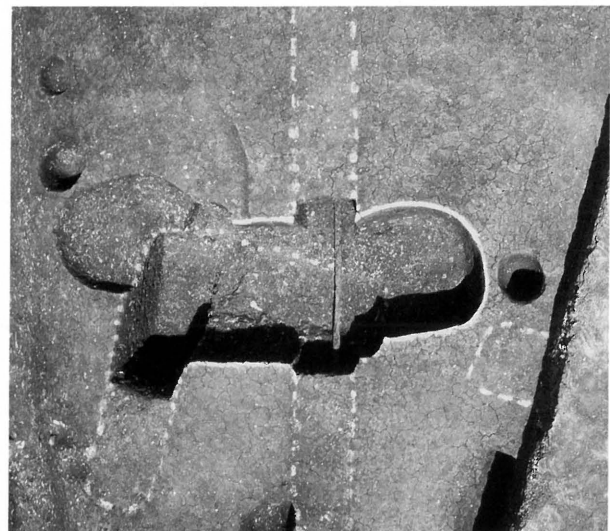
3. A区NR-1土層 (南西から)



4. B区SD-1・2土層 (南西から)



5. B区NR-1土層 (北東から)



6. B区SZ-1-1 (上から)



1. B区SZ-1-2 (東から)



2. B区SZ-1 遺物出土状況 (南東から)



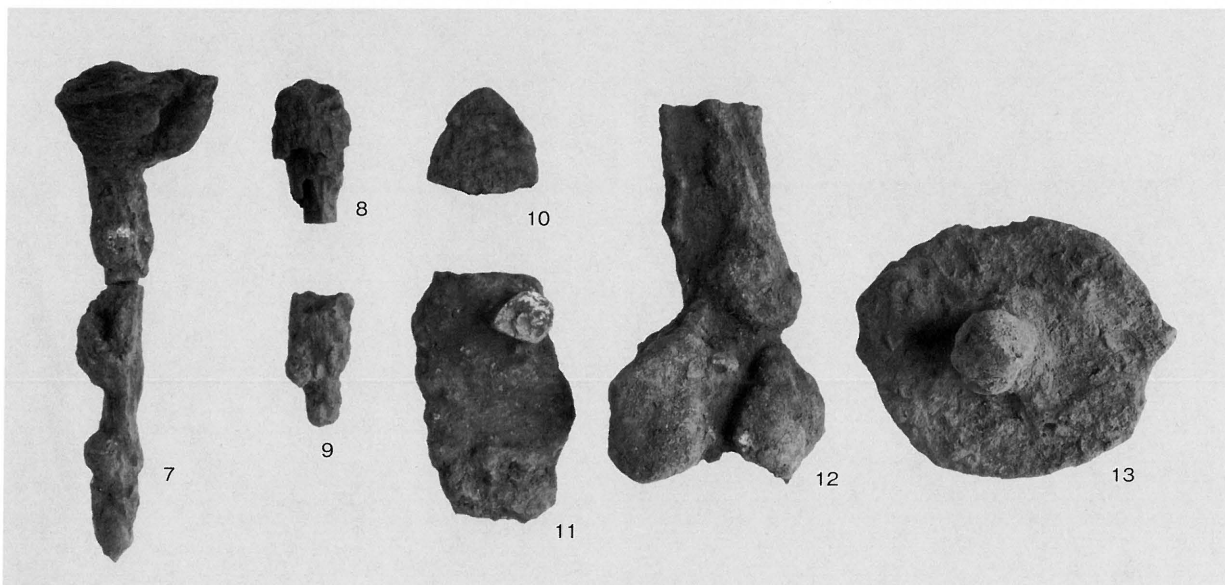
1



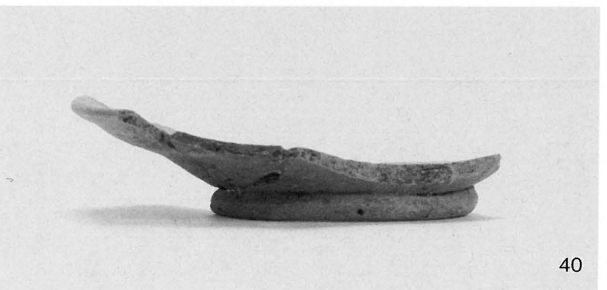
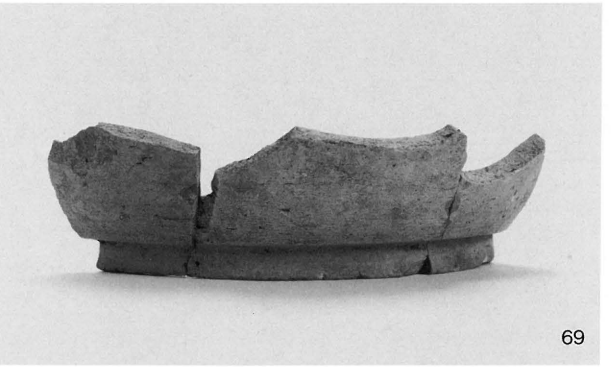
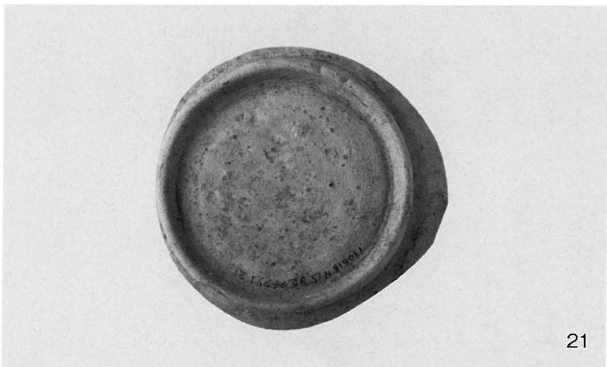
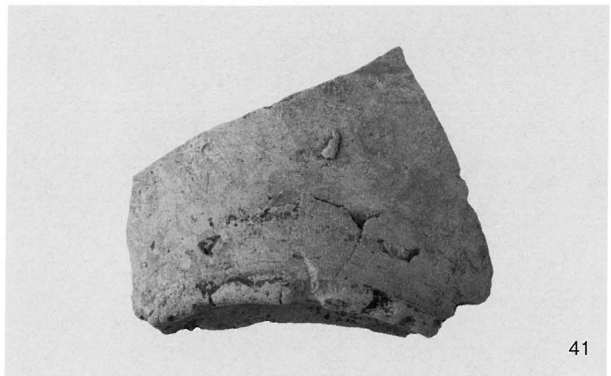
5



6



3. 出土遺物-1



出土遺物-2

よし だ じょう し
吉田城址 第42次

発掘調査

例 言

1. 「吉田城址第42次発掘調査」は、平成24年度に豊橋市役所（事業課・市教育委員会スポーツ課）が事業者となって行った豊橋球場改修工事に伴う吉田城址の第42次調査の報告書である。所在地、調査期間・面積及び担当については、下記のとおりである。

- 豊橋市今橋町4番地 豊橋公園内（豊橋球場）
- 平成24年10月1日～10月19日 ○100㎡
- 岩原 剛（豊橋市教育委員会美術博物館文化財センター）

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	
1. 遺跡の立地	25
2. 歴史的環境	26
3. 吉田城の構造	27
第2章 調査にいたる経過と調査の方法	
1. 調査にいたる経過	30
2. 調査の方法と経過	31
第3章 調査の成果	
1. 遺構	32
2. 遺物	37
第4章 総括	46

挿 図 目 次

第1図 周辺地形図 (1/46,500)	25	第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	26
第3図 近世吉田城の構造 (1/10,000)	29	第4図 藩士屋敷地の位置	29
第5図 調査区位置図 (1/2,500)	30	第6図 調査区平面図 (1/80)	33
第7図 調査区北壁土層図 (1/80)	34	第8図 SB-1平面・断面・出土状況図 (1/40・1/80)	35
第9図 土坑・塀平面・断面図 (1/100)	36	第10図 SE-1平面・断面・出土状況図 (1/40・1/80)	38
第11図 出土遺物-1 (1/3)	40	第12図 出土遺物-2 (1/3)	41
第13図 出土遺物-3 (1/3)	42	第14図 出土遺物-4 (1/3)	43

表 目 次

表1 吉田城関連略年表	28	表2 文書事務の流れ	31
表3 吉田城址第42次 遺物観察表	44		

写真図版目次

1-1 調査区西側（東から）	- 2 調査区東側（西から）
- 3 SA-1・SD-1（西から）	- 4 作業風景（西から）
2-1 調査区の位置（東から）	- 2 SB-1遺物出土状況（上から）
3-1 SE-1土層（北から）	- 2 SE-1遺物出土状況（上から）
4 出土遺物	

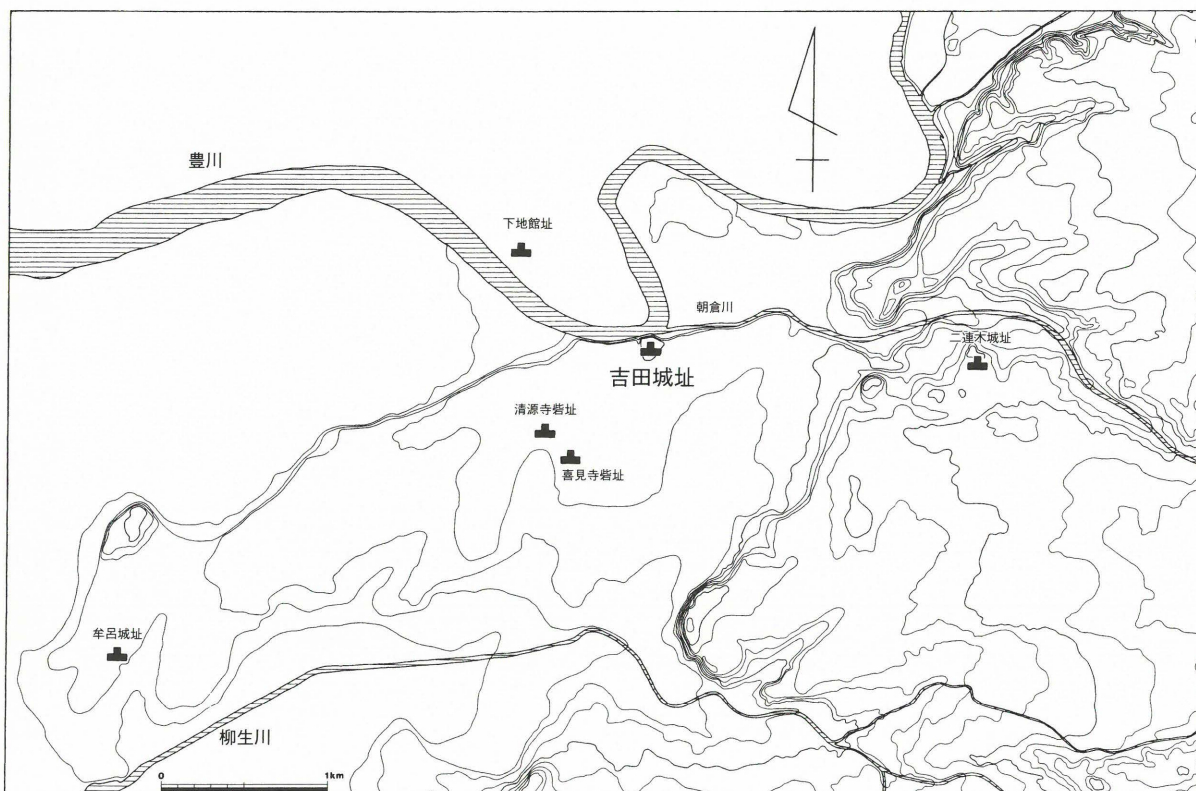
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1図)

豊橋市域は、東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾、北を豊川に限られた地である。市域は広く、人口は約37万人を数える愛知県東部の中核都市である。渥美半島の付け根に位置しており、気候は比較的温暖である。一方で伊勢湾・三河湾を越えて偏西風が吹き込み、近年は隣接した田原市を中心に、風力発電施設の建設が盛んである。

東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と古天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、高位面、中位面、低位面（標高4～10m）の3面に分けることができ、吉田城址の立地する河岸段丘は低位面である。低位面は面の連続性からさらにⅠ～Ⅲ面に分けられている。吉田城址はⅠ面上にあり、周囲より1～2mほど高い小山状のところになる。ちなみにⅡ面は標高4～8mで低位面の主要部、Ⅲ面は吉田城址の南方にある柳生川にそって展開する標高3～5mの部分である。

Ⅰ面が存在する範囲は決して広くはなく、近世吉田城址の全域がⅠ面に立地するわけではない。Ⅰ面は本丸を中心とする地域のみが該当し、本来はわずかに小山、あるいは丘のように隆起していたと考えられるところである。本丸から周辺に向けてはきわめて緩やかな下り傾斜となっており、かつて本丸からは南側の城下や東西に連なる東海道、さらには北に展開する沖積低地を広く望むことができた。



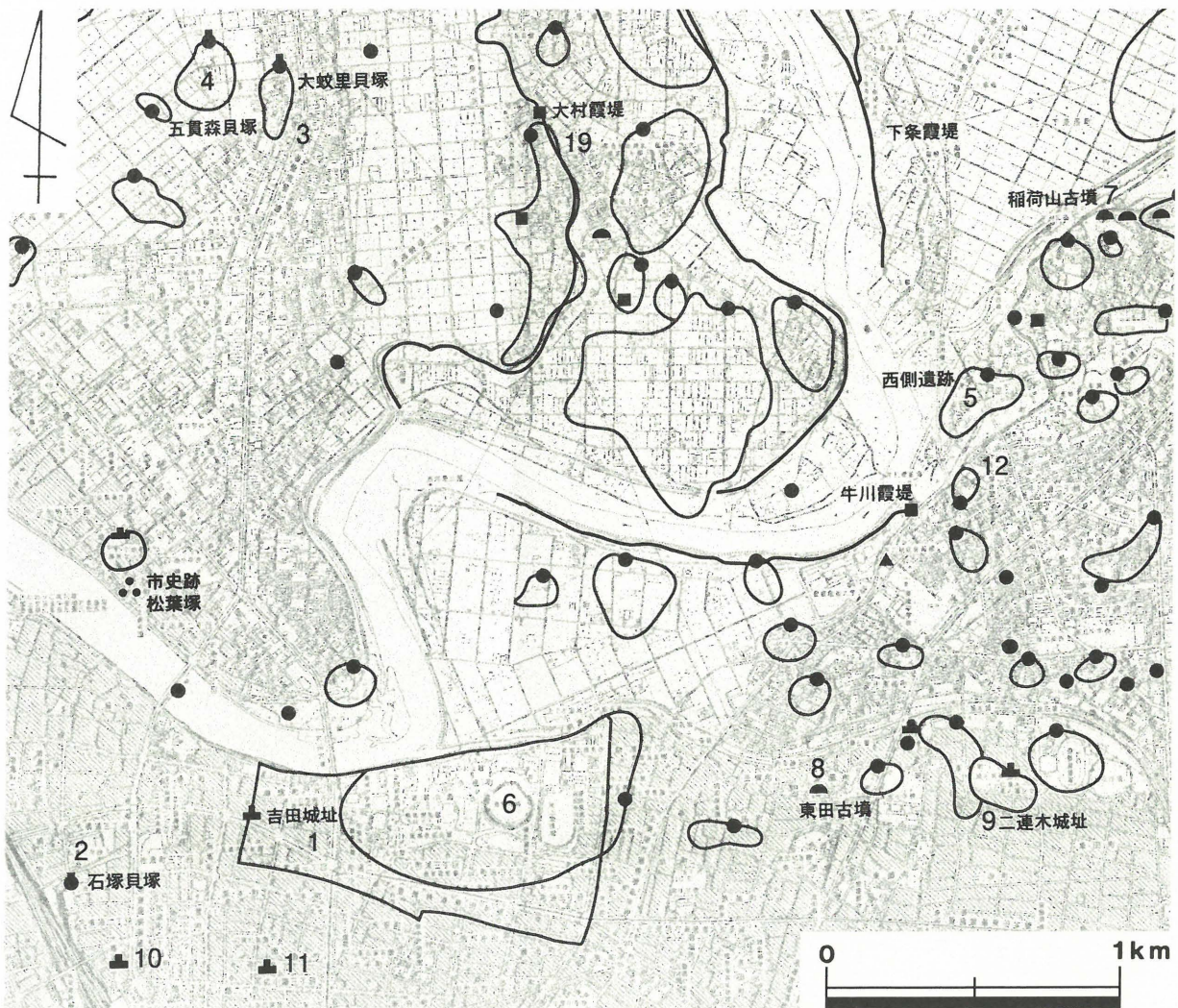
第1図 周辺地形図 (1/46,500)

2. 歴史的環境 (第2図)

吉田城址(1)は豊川を北に望む段丘の端部に立地している。吉田城址から朝倉川をはさんで北東方向に連なる段丘端には、縄文時代以降数多くの遺跡が所在し、市内では遺跡の集中地域のひとつである。

縄文時代 石塚貝塚(2)は段丘端の斜面に形成された前期中葉の貝塚で、ハイガイを主体としている。段丘上の集落と推定される眼鏡下池北遺跡では、早期の煙道付炉穴が約40基検出され、また洗島遺跡(12)は、前期～中期の集落遺跡である。大蚊里貝塚(3)、五貫森貝塚(4)は自然堤防上に立地するヤマトシジミを主体とする晩期の貝塚で、東海地方における晩期土器編年の標識遺跡でもある。なお、吉田城址でも土器棺と推定される条痕文土器が出土している。

弥生時代 沖積低地の自然堤防上に立地する瓜郷遺跡は、中期の拠点集落であり、土器のほか豊富な木製品、玉類、骨角器などが出土している。一方段丘上の遺跡では、西側遺跡(5)で後期前葉の環壕が検出され、寄道式期(山中様式)の土器群が出土したほか、近畿式銅鐸(突線鈕Ⅲ式)の飾耳片が出土している。また同一の段丘上にある浪ノ上遺跡は後期を主体とする集落跡である。吉田城址に重複する飽海遺跡(6)も弥生時代の遺構を含むとされるが、詳細は不明である。



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

古墳時代 吉田城址の調査で、柳葉式の銅鏃1点が出土しており、付近に前期古墳が存在した可能性が高い。北東側に展開する牛川・石巻地区の段丘上には、稲荷山古墳群（7）、森岡古墳群、高井古墳群など、前期～中期に属する方墳を主体とする古墳群があり、豊川下流域の特徴のひとつになっている。首長墳は付近では少ないが、東田古墳（8）は全長40mの前方後円墳で、後円部からは鳥文鏡、大刀が出土したほか、墳丘からは有黒斑の埴輪片が採集されており、中期前葉に築造されたと推定される。一方集落遺跡は、西側遺跡で中期・後期の竪穴建物がまとまって検出されたほか、東田遺跡は後期を主体とする集落址であるが、全体に調査事例が乏しく実態は不明瞭である。

古代 近年の調査で、飽海遺跡からは掘立柱建物を主体に、古代の遺構が集中して確認されている。遺物には墨書土器や緑釉陶器などが含まれることから、官衛的な性質をもった遺跡が付近に展開していたと推定されており、近年は渥美郡衙跡に比定する意見がある。

中世前期 平安時代末以降、付近には伊勢神宮領である飽海神戸、吉田御園が存在した。発掘調査で検出された中世の集落遺構はこれらに比定される。また、街道の整備、さらには豊川舟運の発達により、付近に港を兼ねた宿が成立していた。海道記に現れる「今橋宿」は、その具体像が明らかにされていないが、中世の拠点集落として吉田城の前身・今橋城成立のきっかけになったところと考えられる。

中世後期 戦国時代になると、東三河の西部である豊川を本拠地とする一色城の牧野氏、東部の渥美半島を本拠地とする田原城の戸田氏が東三河での覇権を争うようになる。両者の目的は街道が通過する東三河中央部の占拠と築城にあり、先に戸田氏が二連木城（9）を築城する。牧野氏は今橋宿の直接的な支配を意図し、明応6年（1497）頃に今橋城を築城した（大永2年：1505説もある）。これが後の吉田城である。吉田城は牧野氏、戸田氏、さらに隣国の今川氏や西三河の松平氏によって激しい争奪戦が繰り返されたが、これも吉田城が東三河支配の要衝として認知されていたためである。こうしためぐまのしい城主の交代に終止符を打ったのは松平（徳川）家康で、重臣の酒井忠次を城主に置いている。なお、家康の吉田城攻めに際して、清見寺砦（10）、喜見寺砦（11）が設けられた。

3. 吉田城の構造（第3・4図）

吉田城は豊川の国衆・牧野古白によって築城された今橋城に始まる。当初の規模や構造はまったく不明であるが、近世の『牛久保密談記』に豊川河畔の「馬見塚の岡」を引きならし、「入道ヶ淵」を埋め立てたとする記事に従うなら、豊川に臨む城内の最高所である本丸付近に築かれたと推定される。発掘調査でも、戦国時代の早い段階の遺構・遺物は本丸を中心とする豊川の段丘崖沿いで集中して確認されており、これを裏付けている。

その後田原の戸田氏との抗争や駿河・遠江の今川氏の東三河侵攻、西三河の松平氏による東三河平定など、城主がめまぐるしく変わる中で城は改造されていったと推定される。近世の三の丸の内部では、各所で戦国時代の堀が検出されており、その時期は一樣ではない。興味深いことに、戦国時代の堀は近世吉田城の堀に近接して検出される場合が多く、近世吉田城は戦国時代の構造を踏襲しながら発展的に造営されたものと思われる。なお、このころの吉田城の大手は城の東側にあったと推定されている。

近世吉田城の基本を形造ったのは、豊臣家の家臣である池田輝政（吉田在城時は照政）である。この

とき、北側に豊川を控え、本丸を中心に二の丸・三の丸が重層的に取り囲む構造が形成された。また三の丸の周りをさらに武家屋敷地が取り囲み、その外側を外堀がめぐること、近世吉田城は東西1400m、南北700mを測る東海道筋きっての大規模な城郭となった。大手は城の南側に設けられ、さらに外堀に沿って近世の東海道と城下町が設置されている。ただし、外堀の設置は池田照政ではなく竹谷松平家や深溝松平家など、江戸初期の小規模な譜代大名による可能性が指摘されている。

なお、吉田城には石垣が少なく、本丸周辺と主要な門の周辺のみ限定されていた。現存する石垣の多くは近世に設置されたもので、本丸北西角の鉄櫓台のみ、池田輝政時代の野面積み石垣が見られる。

近世吉田城の構造は残された絵図と現存する遺構によって知ることができる。とくに幕末の状況は「吉田藩士屋敷図」によって各家臣の屋敷地まで特定することが可能である。これによれば、42次調査区は北側でわずかに近世の道路遺構が検出されたことから、飽海口と二の丸の川毛門とを結んで武家屋敷地を東西に貫く川毛通に南面し、幕末には増井弥惣右衛門邸が所在したところに該当する。

表1 吉田城関連略年表

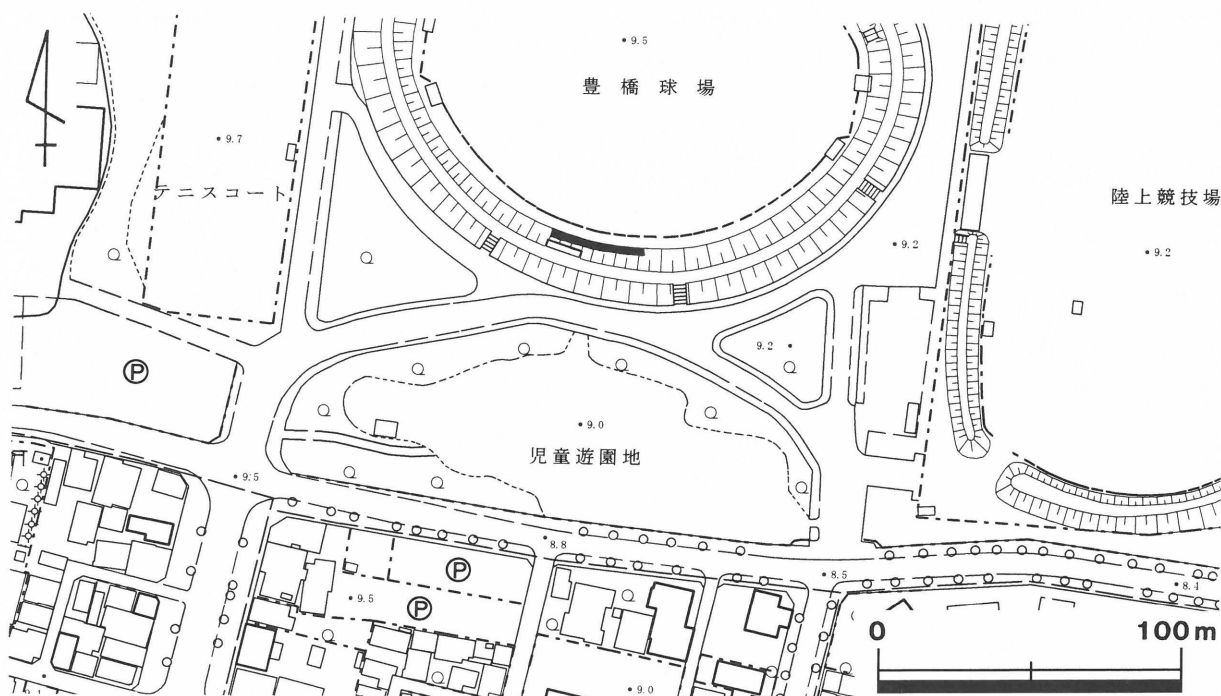
西暦	年号	事 項	歴代城主等
1497	明応6	このころ、今川氏親の命で牧野古白が今橋城を築くという	牧野古白
1506	永正3	10月19日今川氏親が今橋城を攻略し、戸田憲光が牧野古白を破る	戸田憲光
1519	〃 16	牧野成三、戸田金七郎を逐い今橋城に入る	牧野成三
1522	大永2	牧野伝蔵信成、今橋を吉田に改めるという	牧野伝蔵信成
1532	天文元	5月28日松平清康、吉田城を攻め東三河の主部を支配下に置く	
1536	〃 5	今川氏親、大橋知尚を吉田城に置くという	大橋和尚
1537	〃 6	渥美郡大崎在住の戸田金七郎、牧野伝兵衛を逐い吉田城を奪うという	戸田金七郎
1546	〃 15	11月15日今川義元、戸田金七郎を逐い吉田城を攻略する	大原資良
1564	永禄7	5月14日吉田城代小原鎮実、松平勢と下地に戦う 6月22日松平家康、吉田を攻め酒井忠次に吉田小郷一円を宛がう	酒井忠次
1565	〃 8	3月7日松平家康、三河を統一し、後吉田城開城される	
1570	元亀元	豊川に土橋が架橋されるという	
1571	〃 2	4月28日武田信玄、吉田城等を攻める	
1575	天正3	5月21日織田信長、徳川家康とともに武田勝頼を三河長篠に破る	
1582	〃 10	4月17日織田信長、甲斐攻略の帰途吉田城に宿泊する	
1590	〃 18	池田輝政が吉田城主となり、15万2千石を領す	池田照政
1600	慶長5	関ヶ原合戦起こる 12月13日池田輝政、播磨姫路に転封となる	
1601	〃 6	2月松平（竹谷）家清、武蔵八幡山より吉田3万石に移封となる	松平（竹谷）家清
1603	〃 8	2月徳川家康、征夷大將軍に任命され江戸幕府を開く	
1610	〃 15	12月21日松平家清没し、忠清が遺領を継ぐ	松平忠清
1612	〃 17	4月20日松平忠清没し、後嗣なく絶家となる（後再興） 11月12日松平（深溝）忠利、三河深溝より吉田3万石に移封になる	松平忠利
1622	元和8	11月25日吉田城本丸御殿が完成する	
1632	寛永9	6月5日松平忠利没す。8月11日忠房遺領を継ぎ、翌12日に三河刈谷転封となる。水野忠清、刈谷より吉田4万石に移封となる（後五千石加増）	松平忠房 水野忠清
1642	〃 19	7月28日水野忠清信濃松本に転封となり、水野忠善駿河田中より吉田4万5千石に移封となる	水野忠善
1645	正保2	7月14日水野忠善岡崎に転封となり、小笠原忠知豊後杵築より吉田4万5千石に移封となる	小笠原忠知
1654	承応3	向山池を築立て、城下の総堀に流入させる	
1693	元禄6	8月吉田城下の下水道が改修されるという	
1697	〃 10	4月19日小笠原長重老中となり、武蔵岩槻に転封となる 6月10日久世重之、丹波亀山より吉田5万石に移封になる	小笠原長重 久世重之
1702	〃 15	8月16日久世重之、新居関番を命じられる（以後吉田藩管轄）	久世重之
1705	宝永2	10月晦日久世重之下総関宿に転封となり、牧野成春関宿より吉田8万石に移封となる	牧野成春
1707	〃 4	10月4日大地震により吉田城本丸御殿倒壊する	
1712	正徳2	7月12日牧野成央日向延岡に転封となり、松平（大河内）信祝下総古河より吉田7万石に移封となる	松平（大河内）信祝
1729	享保14	2月15日松平信祝遠江浜松に転封となり、松平（本庄）資訓吉田7万石に移封となる	松平（本庄）資訓
1749	寛延2	10月15日松平資訓京都所司代になると同時に遠江浜松に転封、松平（大河内）信復浜松より吉田7万石に移封となる	松平（大河内）信復
1854	安政元	11月4日大地震により場内建物倒壊多し	
1869	明治2	2月23日大河内信古、版籍奉還を奏請する	大河内信古

第2章 調査にいたる経過と調査の方法

1. 調査にいたる経過 (第5図)

吉田城址は、豊橋市街地にある都市公園「豊橋公園」や豊橋市役所、市立豊城中学校など公共施設の用地に三の丸以内の主要部分が存在するほか、豊橋球場や豊橋市陸上競技場および住宅地等は武家屋敷地に該当する。今までに公共施設の建設や住宅の新築・改築に際して、地下の遺構に明らかに影響を与えるものについては事前の発掘調査による記録保存を行ってきた。豊橋市役所の庁舎や地下駐車所の建設、豊城中学校の校舎建設、豊橋警察署、東三河県庁、東三河土木事務所など各種公共施設の建設に際して、豊橋市教育委員会や愛知県埋蔵文化財センターによって、比較的規模の大きな発掘調査が行われている。また、公園内はさまざまな用途による小規模な施設の建設も行われており、トイレの新設・建て替えや防災用貯水槽、防災用アンテナの設置などに際しても発掘調査を実施している。

第42次調査は、市教育委員会スポーツ課より豊橋球場の改修工事に関する相談を受けたことに端を発する。改修工事は本部席、便所、バックスクリーン等の建て替えを行うもので、年度途中で補正による予算化がはかられたものである。本部席や便所については基礎の掘削深度が浅いこと、既存の施設の範囲内であることから地下の遺構に与える影響は少ないと判断したが、バックスクリーンは既存のものよりも規模が大きく、さらに基礎が深いものであった。そこで範囲が拡張する部分を対象に記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。



第5図 調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査の方法と経過

発掘調査は、平成24年10月1日～10月19日に行った。既存のスコアボードと外野フェンスの間にあたる拡張予定地に細長く調査区を設けている。調査面積は100㎡である。

調査区は東西に細長く、外野フェンスの形状に沿って緩やかに湾曲する変則的な形状であり、調査区にあわせて軸を変えながら基準点を設け、調査を進めた。調査に並行して野球場を使用することもあるが、さまざまな制約のもとに調査を行っている。調査で生じた排土は、調査区の西側である外野スタンド（盛土・草生）の一部に一輪車で搬送したうえ、仮置きした。遺構の埋土は著しく硬化しており、その掘削には大きな労力を強いられた。

調査の基本的な流れは下記のとおりである。

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、順次遺物を取り上げる。
3. 業者委託で基準点を設置し、1／20縮尺の平面図を作成する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、個別に遺構写真を撮影する。
5. 高所作業車を使用し、調査区の全景写真を撮影する。

なお、調査に伴う文書事務の流れは下記のとおりである。

表2 文書事務の流れ

文書名	文書番号	日付	作成者	提出先
埋蔵文化財発掘の通知について	24豊教ス第123号	平成24年8月13日	豊橋市長 佐原光一 (市スポーツ課)	愛知県教育委員会
周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について	24教生第1402号	平成24年9月5日	愛知県教育委員会	豊橋市長 佐原光一 (市スポーツ課)
埋蔵文化財発掘調査の報告について	24豊教美第363号	平成24年10月24日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長
埋蔵文化財の発掘について（受理通知）	24教生第1953号	平成24年11月12日	愛知県教育委員会教育長	豊橋市教育委員会教育長
発掘調査完了報告票	24豊教美第363号	平成24年10月24日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長
埋蔵文化財発見・認定通知書	24豊教美第364号	平成24年10月24日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県豊橋警察署長

第3章 調査の成果

1. 遺構

調査区は幅2.1～2.8m、長さ39.5mに渡る細長い形状である。野球場や終戦後に搬入された焼土を含む瓦礫、軍隊関連の造成土に厚く覆われていたが、遺構の残存状態は良好である。また、調査区の北壁において、厚さ5cm程度の砂利層（第7図の7層）が一面に見られたが、これは近世の道路遺構（川毛通）に伴う舗装面と判明している。

遺構として、平安時代後期の井戸、戦国時代の井戸、近世の道路遺構に伴う堀跡、近世の土坑や柱穴などが確認された。このうち特徴的なもの、あるいはおもな遺物が出土したものをとりあげて説明する。

A. 建物（第6・8図）

SB-1

竪穴建物である。調査区の中央付近で検出され、北側は近世の堀跡と土坑に切られ、南側は調査区外である。平面形は不明瞭だが方形あるいは隅丸方形を呈すると思われ、主軸方位はおおよそ南北軸である。規模は東西約4.6m、深さは検出面から0.3mを測る。埋土は黒褐色及び茶褐色砂質土ほかである。断面は箱形で、北から東側の一部に壁溝がわずかに遺存している。支柱穴は検出されていない。

出土遺物は須恵器の有台坏、無台坏、有台盤、鉄鉢、壺、皿、甕、土師器の壺など（第11図1～15）比較的豊富に出土しており、遺構の時期は奈良時代の8世紀である。

SB-2

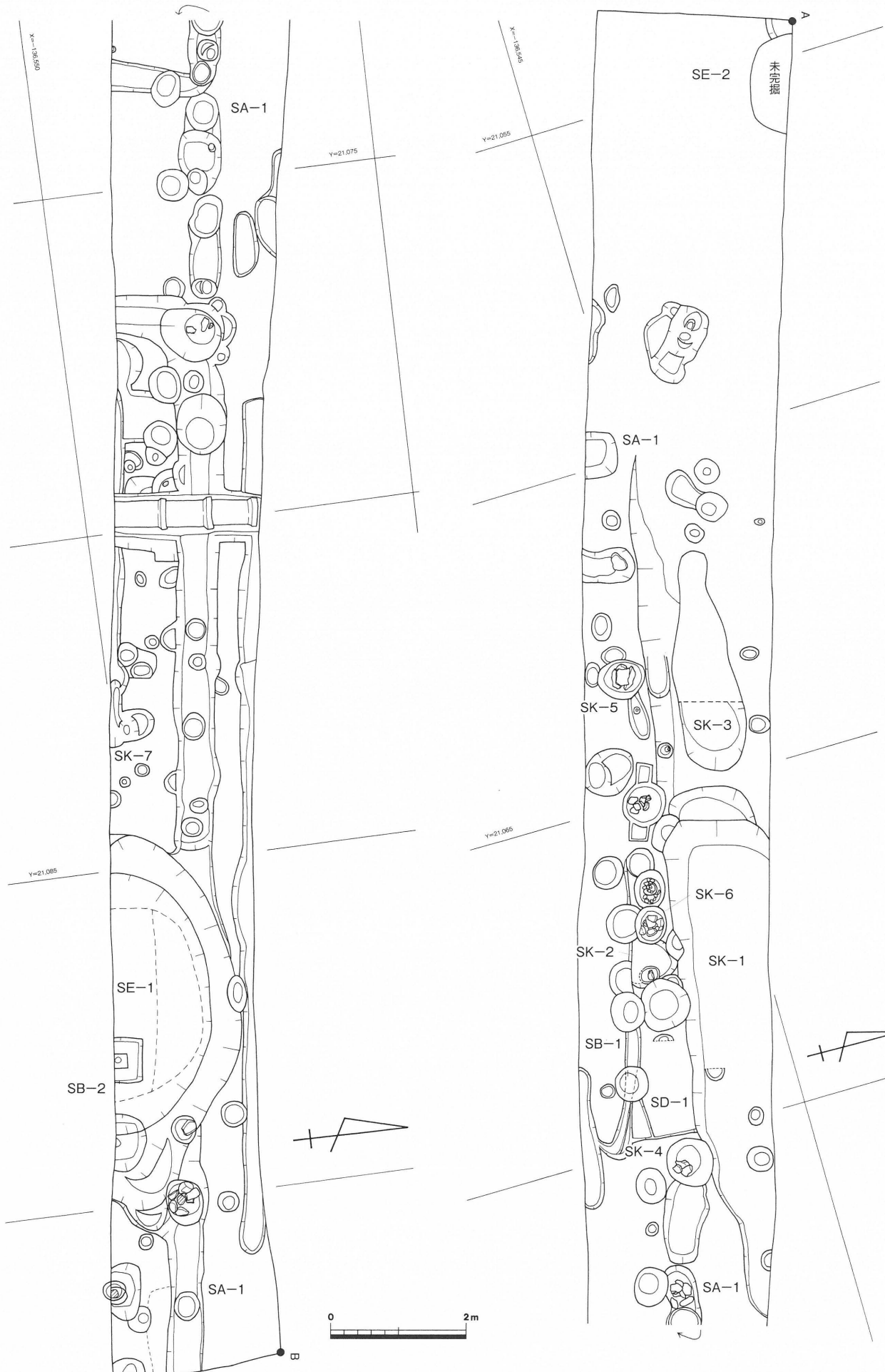
掘立柱建物で、調査区の東端付近で検出された。南壁に半分ほどがかかっており、古代の大型井戸SE-1の埋土を掘り込んでいる。建物の北辺のみが検出され、南側だけでなく、東側にもさらに柱穴が続く可能性がある。柱穴はいずれも平面形が方形を呈し、柱穴の規模は0.65～0.8mほど、深さは南壁で観察される断面から0.4～0.45mほどである。柱穴はすべて柱痕跡が明瞭である。

出土遺物には古代の須恵器や灰釉陶器、山茶碗などがあるが、すべて大型井戸SE-1からの混入品であろう。柱穴の形状や柱痕跡の状況から、遺構の時期は近世と考えられる。武家屋敷地を構成した建物の一部であろう。

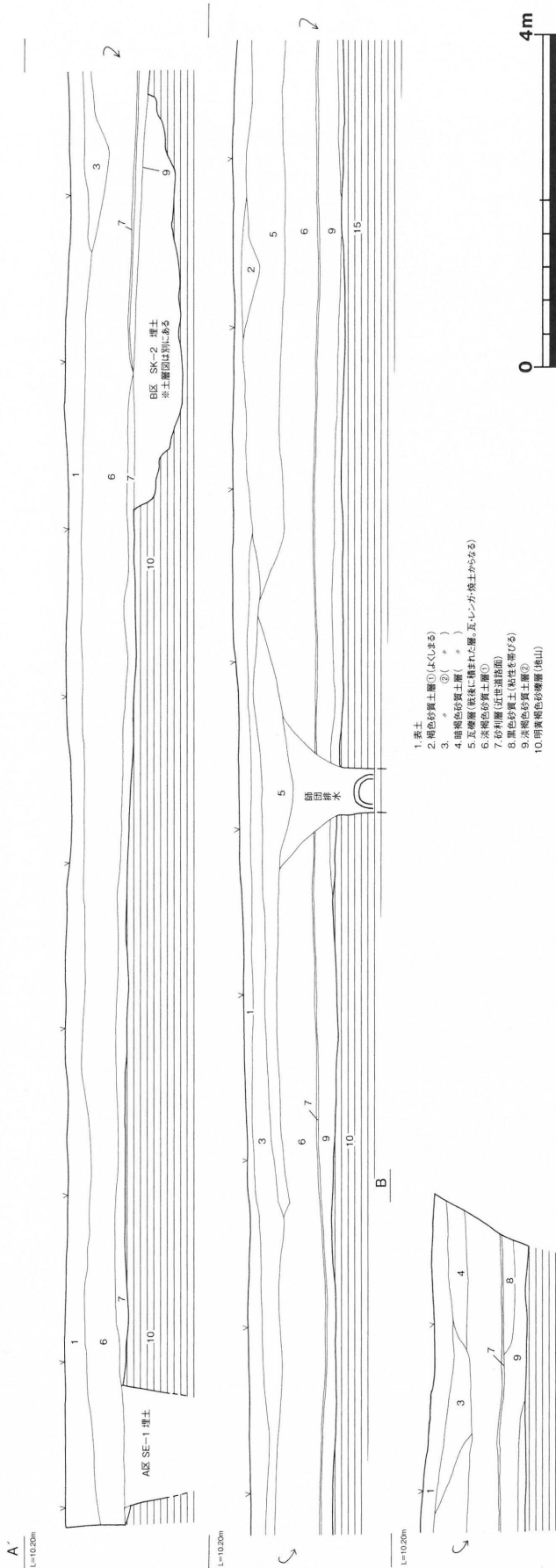
B. 堀（第6・9図）

SA-1

調査区を東から西へ縦断する遺構で、調査区東壁の中央から始まり、南壁よりもさらに先に続いている。ほぼ直線上に伸びているが、調査区の形状が緩く彎曲するためこのような状況となる。溝状の遺構の中に柱穴が並ぶのを基本とするが、溝状の部分が途切れるところも見受けられる。また柱穴は間隔が不均等で、柱の根石や根固め石があるもの、ないものなど多様で、南側には並行して柱穴列が見られる



第6図 調査区平面図 (1/80)



第7図 調査区北壁土層図 (1/80)

ことから、この塀は複数回の建て替えが行われているものと思われる。規模は検出された長さが35m以上で、調査区の東寄りに見られる溝の幅は0.6～0.7mほどである。出土遺物のうち、図化できるものは塀の一部として示したSD-1、SK-2・4・5・6で紹介している。古代から中世の遺物を含んでいるが、その構造や道路遺構に面していることから、遺構の時期は近世と考えられる。

C. 溝 (第6・9図)

SD-1

SB-1の北側で検出された。近世の塀SA-1の一部と思われるが、古代の遺物を含んでおり、SB-1を壊した際に混入した可能性がある。埋土は淡灰褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の高盤(第14図92)がある。

D. 土坑 (第6・9図)

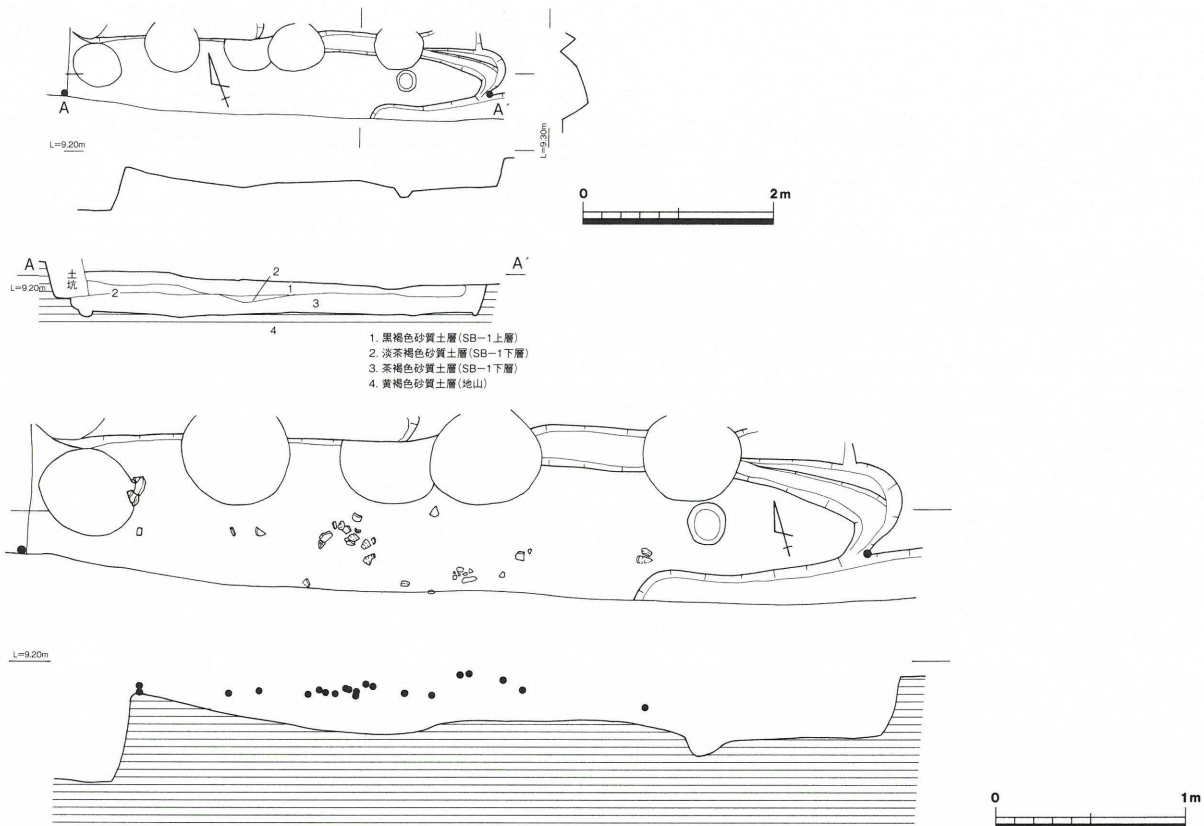
SK-1

SB-1の北側で検出された土坑で、道路遺構の下に存在したものである。北側は調査区外となる。規模は長さ6.4m以上、幅は最大2.4m、深さは最も深いところで検出面から0.75mである。断面は箱形を呈し、底は西に向かって深くなる。埋土は褐色系の砂質土である。

出土遺物は瀬戸・美濃窯産陶器の折縁皿(第14図93)、土師器の半球形鍋(同94)があり、遺構の時期は近世である。この上に川毛通が設けられていることから、道路は近世のある段階で造り替えられたようである。

SK-2

SD-1の内部に設けられた柱穴で、塀を構成する一部と考える。塀の建て替えにより



第8図 SB-1平面・断面・出土状況図(1/40・1/80)

複数の柱穴と重複するが、規模は径0.85m、深さ0.6mである。埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物は須恵器の無台坏(第14図99)があり、混入品と考えられる。遺構の時期は近世であろう。

SK-3

調査区の西寄りで検出された土坑で、完掘はしていない。規模は長さ3.3m、幅は最大0.9m、深さは検出面から0.35mである。断面は箱形を呈し、埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物は近世の軒平瓦(第14図100)があり、瓦当は水野家の家紋瓦である「丸に沢瀉文」である。遺構の時期は近世以降である。

SK-4

調査区の中央付近、近世の塀SA-1の一部となる柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.75m、短径0.65m、深さは検出面から0.4mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。

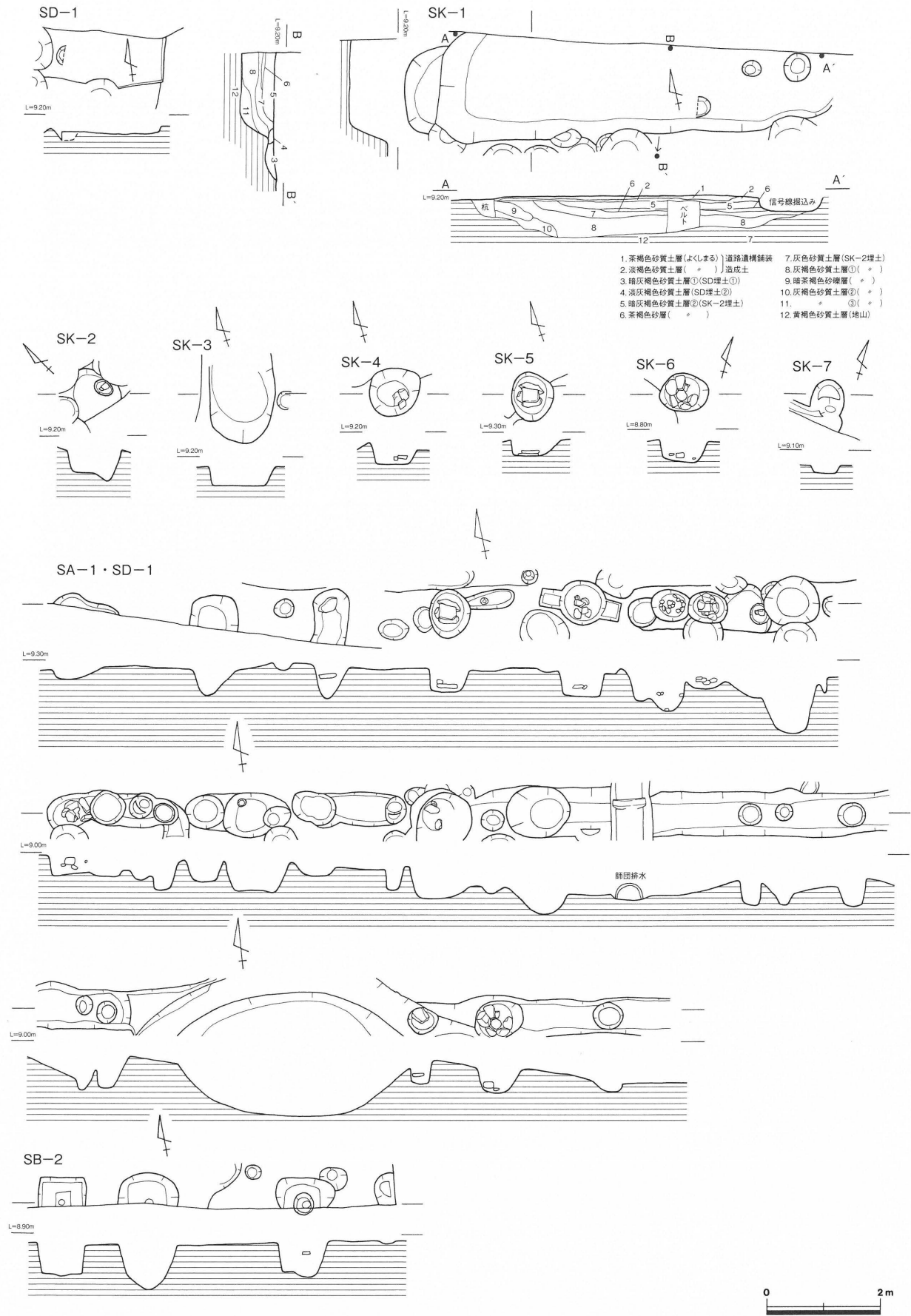
出土遺物は灰釉陶器の碗(第14図95・96)、瀬戸・美濃窯産陶器の播鉢(同97)、土師器の半球形鍋(同98)があり、遺構の時期は近世である。

SK-5

調査区の西寄りで検出された土坑で、近世の塀SA-1の一部となる柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.6m、深さは検出面から0.3mを測る。底には扁平な石材が積まれて柱穴の根石になっている。埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師器のおとし蓋(第14図103)があり、遺構の時期は近世であろう。

SK-6



第9図 土坑・塀平面・断面図 (1/100)

調査区の中央やや西寄り、近世の堀SA-1の一部となる柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.55m、深さは検出面から0.4mを測る。底には円礫が積まれており、柱の根石もしくは根固めに使用されたものだろう。埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物は陶器片があり、遺構の時期は近世である。

SK-7

調査区の東寄りで検出された柱穴と考えられる土坑である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.5m、短径0.4m、深さは検出面から0.15mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物は須恵器の有台坏（第14図101）と陶器の碗（同102）があり、遺構の時期は近世である。

E. 井戸（第6・10図）

SE-1

調査区の東寄りで検出された大型の井戸で、南半は調査区外となる。調査及びその後の施設建設上の制約から、検出面から1mほどの深さで掘削をやめている。平面形は円形と考えられ、東側は0.9mほど張り出させて、階段状の通路を形成している。規模は、東西5.6m（張り出しを含む。除いた場合は4.7m）、南北1.9m以上を測る。埋土は褐色系の砂質土で、自然崩落によって側面には暗灰色系の砂質土が堆積している。

埋土の最上層を中心に、遺物が多数出土した。遺物は検出面から深さ0.2m付近まで密集し、それより下はまばらになるが、深さ1mまで散発的に出土している。従って、井戸を廃棄するときに最終段階で窪地になったところに集中して遺物を廃棄したものとする。

出土遺物には須恵器、灰釉陶器、山茶碗、土師器の鍋（第11図16～第13図87）などが見られ、すべてが混在した状態で出土している。中でも二次的に被熱して大きく歪んだガラス製品片の出土が特筆される。遺構の時期は、灰釉陶器のおもな帰属時期である11世紀には機能していた可能性があり、12世紀後葉に廃絶したと考えられる。

SE-2

調査区の西端で検出された井戸で、北半は調査区外となる。川毛通の下に該当するところである。平面形は円形を呈すると考えられ、規模は径1.5mを測り、調査及びその後の施設建設上の制約から、検出面から0.5mほどの深さで掘削をやめている。埋土は暗灰褐色砂である。

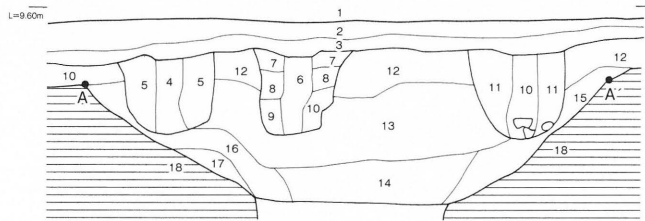
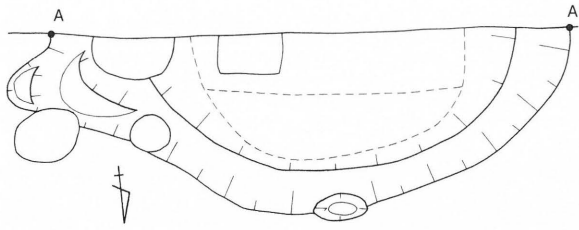
出土遺物は灰釉陶器の大碗、山茶碗、瀬戸・美濃窯産陶器の丸皿、土師器の半球形鍋（第13図88～91）があり、遺構の時期は戦国期から近世である。

2. 遺物

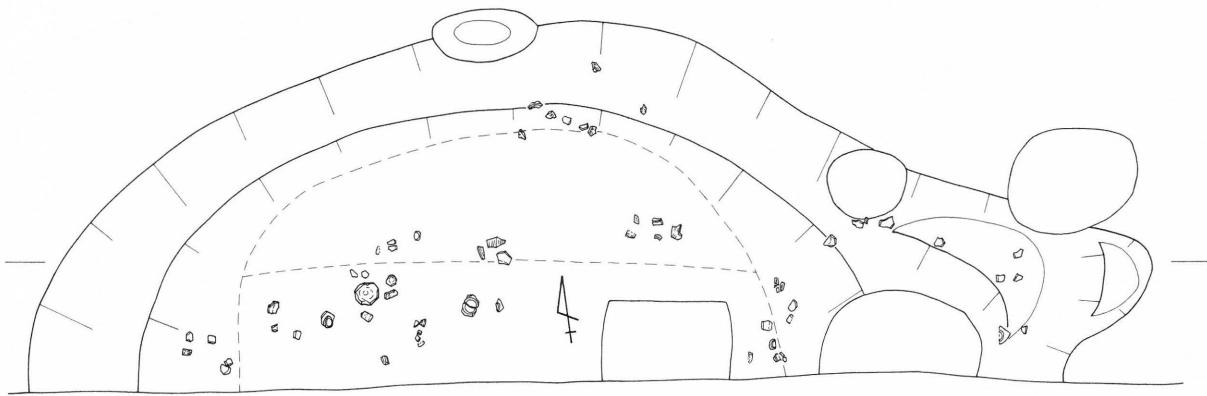
A. 建物

SB-1（第11図1～15）

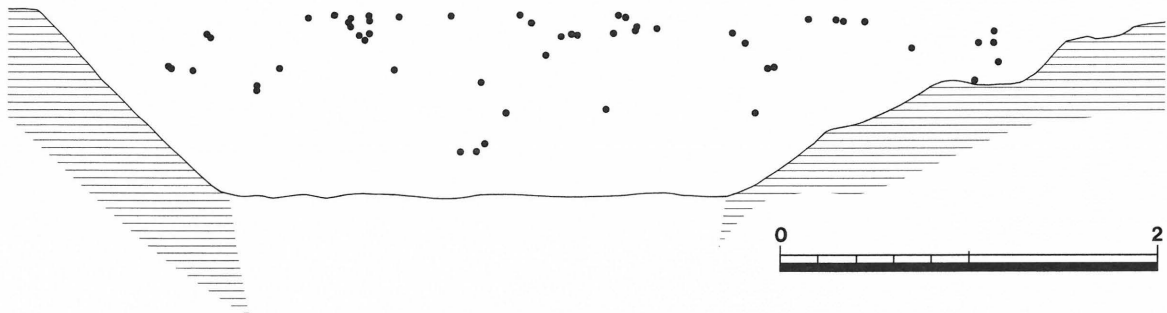
1～14は古代の須恵器である。1～4は摘みが欠損した蓋である。5は高台のある有台坏、6は壺の底部、7・8は無台坏。9は鉄鉢の口縁部で、外面には沈線がめぐる。10は皿、11は有台盤で断面角



1. 瓦礫(戦後に盛られたもの、焼土を含む)
2. 淡褐色砂質土層(よくしまる、近世・近代造成土)
3. 茶褐色砂質土層①()
4. 暗灰褐色砂質土層①(SK-3柱痕跡)
5. 暗茶褐色砂質土層①(SK-3掘方埋土)
6. 暗灰褐色砂質土層②(SK-4柱痕跡)
7. 暗茶褐色砂質土層②(SK-4掘方埋土①)
8. 茶褐色砂質土層②() ②
9. 灰褐色砂質土層() ③
10. 灰褐色砂質土層①(SK柱痕跡)
11. 暗灰褐色砂質土層③(SK掘方埋土)
12. 灰褐色砂質土層②(近世造成土又は表土)
13. 暗灰褐色砂質土層④(SK-10埋土)
14. 黒褐色砂質土層(SK-10埋土、多量の円礫を含む)
15. 暗灰褐色砂質土層①(SK-10埋土)
16.) ②(SK-10埋土、多量の礫を含む)
17. 暗灰褐色砂質土層⑤(SK-10埋土)
18. 褐色砂礫層(地山)



L=9.00m



第10図 SE-1平面・断面・出土状況図(1/40・1/80)

形の高台が見られる。13は壺、14は甕の体部片で、内面は当て具痕をナデ消しており、薄く灰釉をハケ塗りする。須恵器はいずれも湖西窯産である。15は土師器の甕で、いわゆる三河型と呼ばれるもの。これらはいずれも8世紀のものである。

B. 溝

SD-1 (第14図92)

92は須恵器の高盤である。湖西窯産で、8世紀のものと考えられる。

C. 土坑

SK-1 (第14図93・94)

93は瀬戸・美濃窯産陶器の折縁皿で、内外面に灰釉が施され、見込みには鉄絵が見られる。94は土師器の半球形鍋である。いずれも近世のもの。

SK-2 (第14図99)

99は須恵器の無台坏である。箱形を呈する。湖西窯産で8世紀のもの。

SK-3 (第14図100)

100は軒丸瓦である。瓦当面には水野家の家紋である「丸に沢瀉文」が見られる。

SK-4 (第14図95～98)

95・96は灰釉陶器の碗である。いずれも高台の形状は崩れ気味で、95はO-53～H-72号窯期、96はH-72号窯期に比定される。二川窯産。97は瀬戸・美濃窯産陶器の挿鉢で、口縁端部は外側に折れ曲がる。大窯第4段階末のもの。98は土師器の半球形鍋である。

SK-5 (第14図103)

103は土師器のおとし蓋で、中央には摘みがあったと思われるが欠損している。近世の羽無釜に伴うものとする。

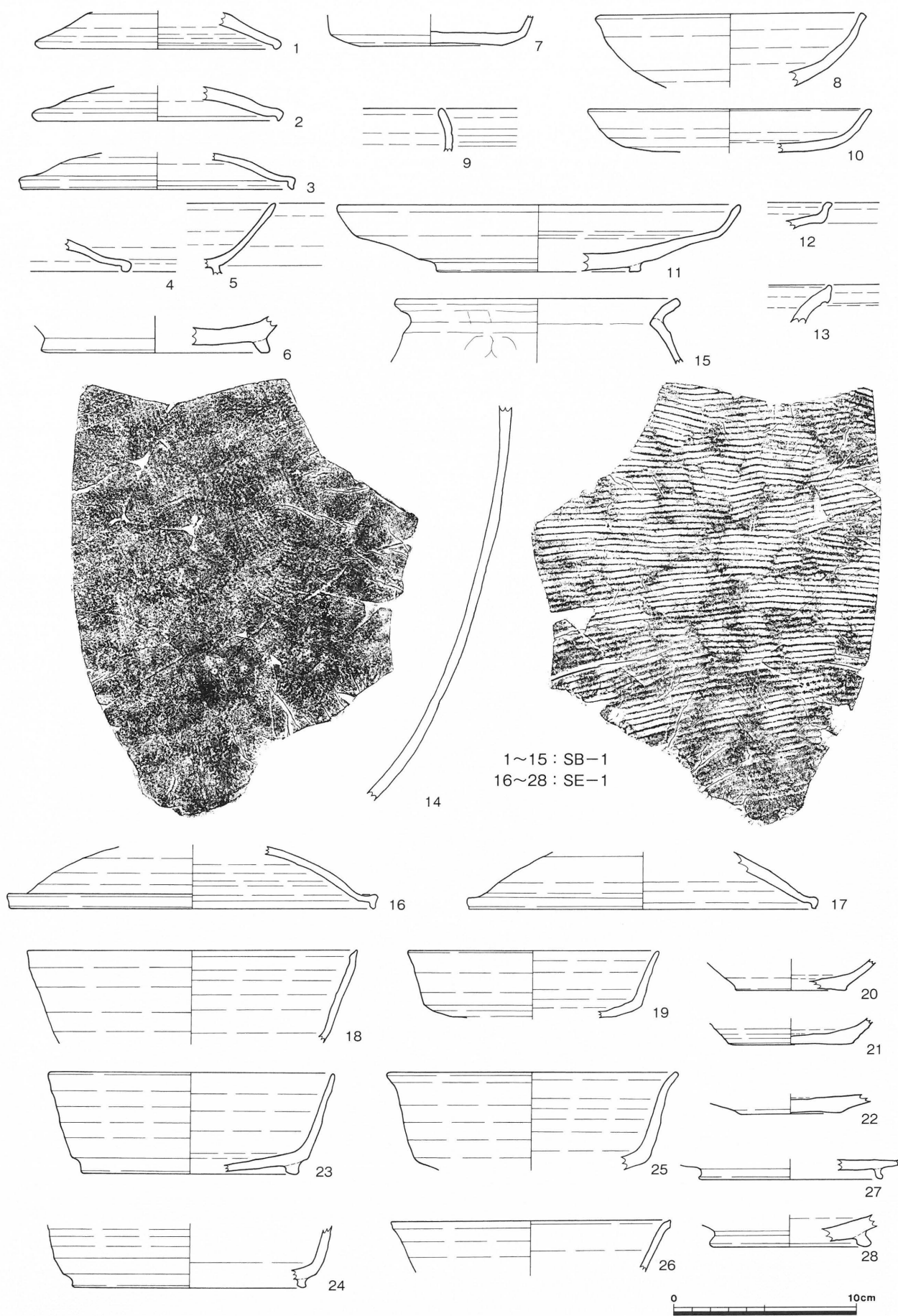
SK-7 (第14図101・102)

101は須恵器の有台坏である。湖西窯産で8世紀のもの。102は陶器の碗で、透明釉がかかる。近世のもの。

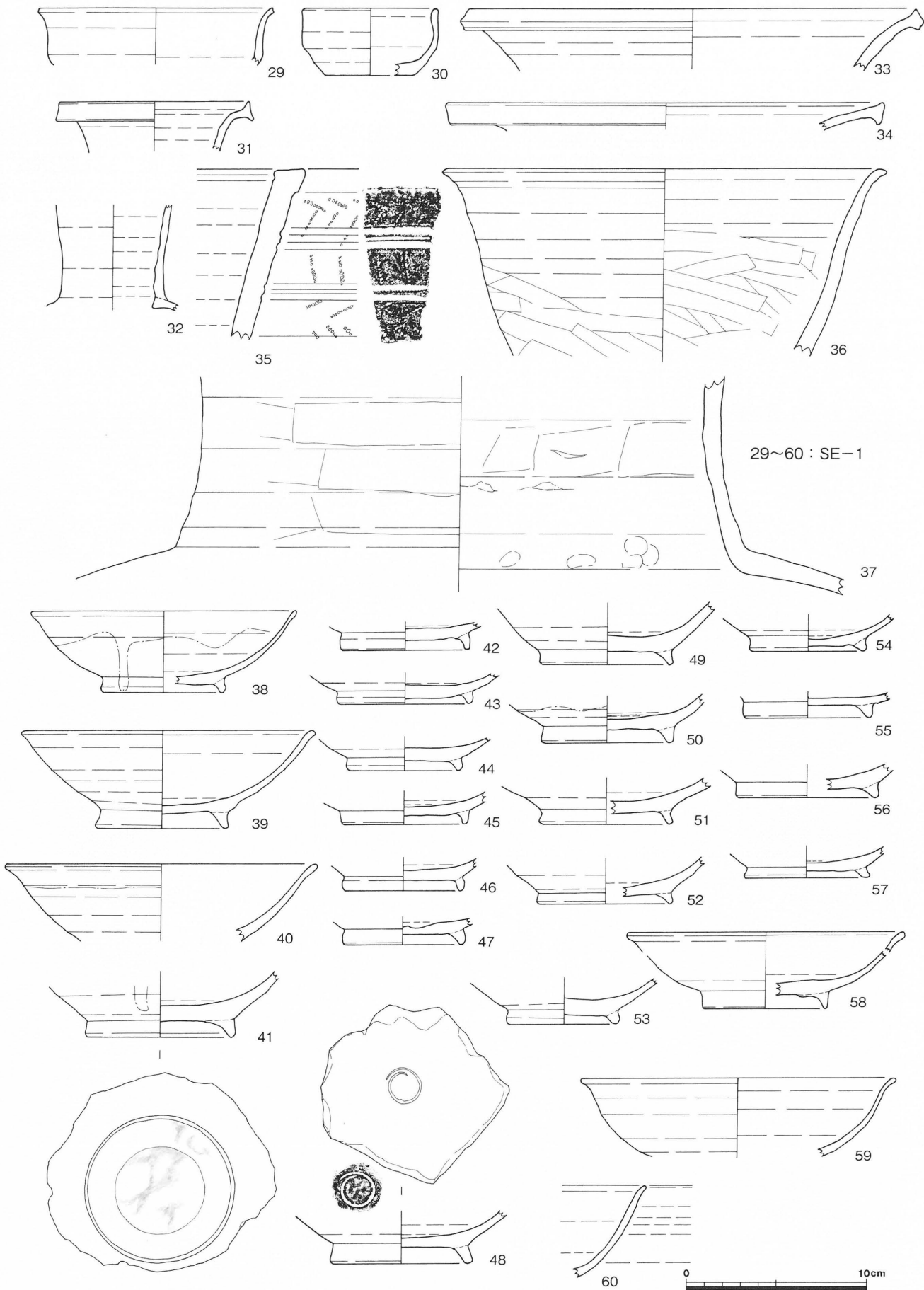
D. 井戸

SE-1 (第11図16～第13図87)

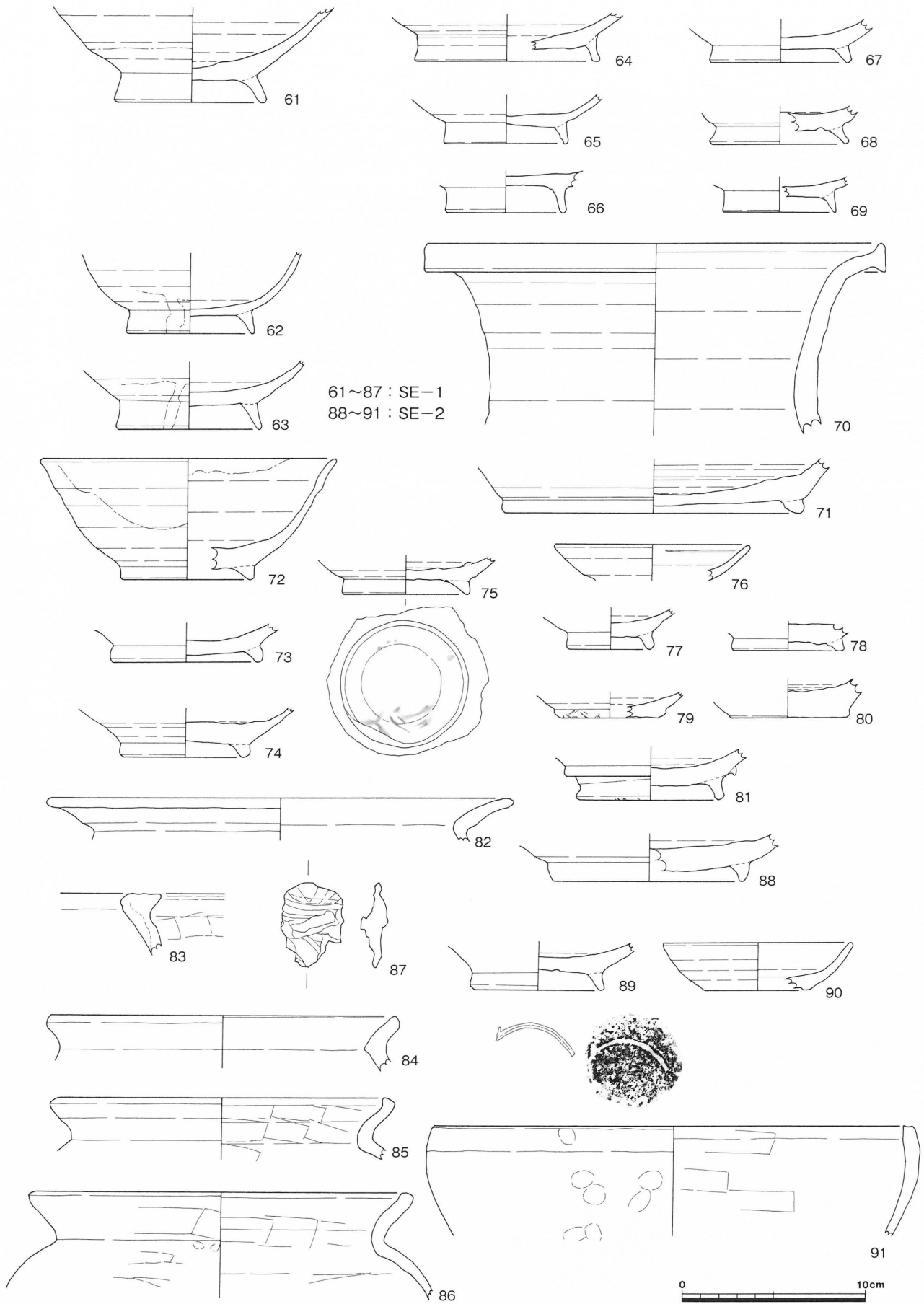
16～34は須恵器で、33を除きすべて湖西窯産である。16・17は蓋で、摘みを欠損する。18～22は無台坏で、18は口縁端部内面に面を持つ。20～22は灰釉陶器に併行するもので、いわゆる「ねこ茶碗」と呼ばれるものである。23～28は有台坏で、25・26は口縁部が外反する。29は坏で、有台坏に比べて口径が小さく、口縁部は強く外反する。30は小坏。31・32は長頸壺で、31は口縁端部が上下に引き出される。33は広口壺、34は大型の長頸壺である。35は器種不明の製品で、外面は櫛の刺突が連続して羽状に施される。36は陶白の体部で、内外面とも下位に粗い板ナデが施される。37は甕の頸部付近である。以上は、20～22が10～11世紀に、そのほかはすべて8世紀に比定される。



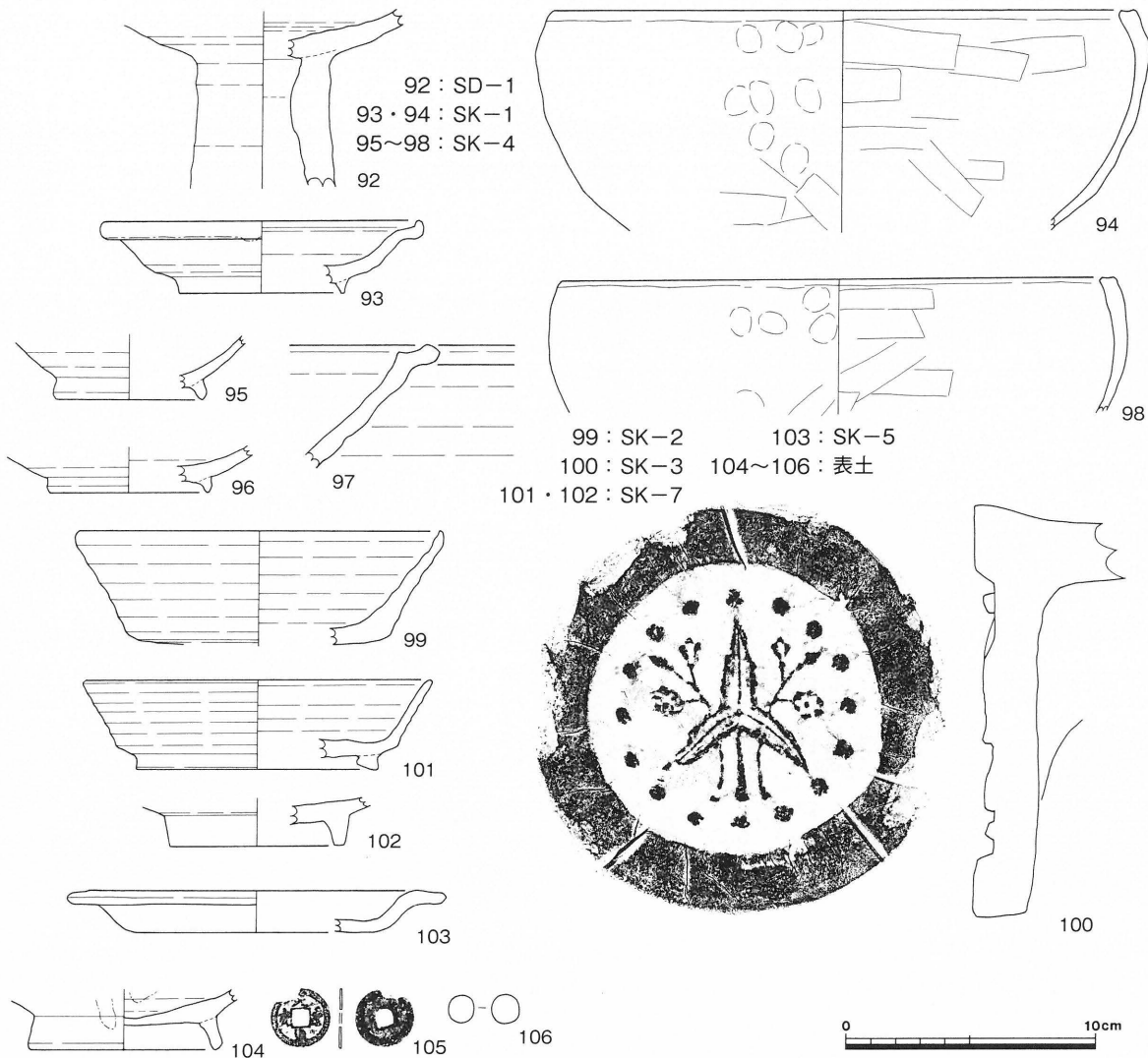
第11図 出土遺物-1 (1/3)



第12図 出土遺物-2 (1/3)



第13図 出土遺物-3 (1/3)



第14図 出土遺物-4 (1/3)

38~71は灰釉陶器である。38~69は碗で、このうち48・58~66、68・69は深碗である。また41は墨書土器で、底部外面にはわずかに墨書が認められるが判読できない。48は内面の見込みにヘラ描きの円文が見られる。70は広口壺で、やや長い口頸部となる。71は瓶類の底部で、おそらく平瓶であろう。以上は64のみ猿投窯産、70・71は二川窯を含む湖西窯産、そのほかはすべて二川窯産で、高台がややしっかりと作られる46・56はO-53~H-72号窯期、そのほかはH-72号窯期と考えられるが、厳密に言えば、高台の形状の崩れが著しいものは尾張の百代寺に併行する小谷窯期に比定される。

72~81は山茶碗類で、渥美・湖西型が大半を占める。72~75・78は碗で、いずれも高台は高い。68は内面にススが付着している。また75は墨書土器で、わずかに墨書の痕跡が見られる。76・77は小碗である。79は高台が低くなり、底部の周囲に貼りついたような形状となる。小皿としたが小碗の最終形態的なものだろう。80は壺の底部と考えられ、回転糸切り痕が見られる。81は高台の上に断面三角形の突帯を巡らせており、托を模したいわゆる二重高台碗である。以上は大半が1型式で、79のみ2型式に下る可能性がある。

82~86は土師器である。82は土師器の甕の口縁部で、古代の三河型甕である。83は清郷型甕で、口縁

端部は水平に引き出され上面は平坦になる。清郷型3。84~86は鍋で、口縁部は厚く端部がわずかに内側に折り曲げられており、初期の伊勢型鍋であろう。

87はガラス製品の破片である。製品・帰属時期ともに不明で、型づくりされたものと考えられ、表面にヒダ状の装飾が見られる。二次的な被熱のため全体が大きく歪んでいる。色調は淡いオリーブ色を呈している。

SE-2 (第13図88~91)

88は灰釉陶器の大碗である。二川窯産でO-53~H-72号窯期。89は山茶碗の底部で、外面にはヘラ描き状の沈線が見られる。渥美・湖西型で1型式。90は瀬戸・美濃窯産陶器の丸皿で、削出し高台となり鉄釉が施こされる。大窯第2~3段階。91は土師器の半球形鍋である。

F. その他

表土 (第14図104~106)

104は灰釉陶器の深碗で、高い高台を持つ。二川窯産でH-72号窯期に比定される。106は輸入銭の元豊通寶。106は鉛製の鉄砲の玉で、火縄銃に使われるものである。緑青が吹き、表面は風化が著しい。

表3 吉田城址第42次 遺物観察表

No	遺構	種類	器種	口径	器高	底径	その他	残存率%	胎土	焼成	色調	調整等	産地	時期	備考
1	SB-1	須恵器	蓋		(2.0)	13.6		10	密	良好	灰色	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、天井に重焼き痕	湖西窯産	8世紀	
2	SB-1	須恵器	蓋		(1.9)	12.8		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
3	SB-1	須恵器	蓋		(2.0)	15.2		15	密	良好	灰色	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
4	SB-1	須恵器	蓋		(1.8)			3	密	良好	淡灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀	
5	SB-1	須恵器	有台坏		(3.8)			10	密	良好	灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀	
6	SB-1	須恵器	壺		(2.0)	12.6		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台、内面に自然釉	湖西窯産	8世紀	
7	SB-1	須恵器	無台坏		(1.6)	7.9		20	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	二段底
8	SB-1	須恵器	無台坏	15.0	(4.0)			15	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
9	SB-1	須恵器	鉄鉢		(2.3)			2	密	良好	灰色	回転ナデ、外面に沈線	湖西窯産	8世紀	
10	SB-1	須恵器	皿	15.8	(2.4)			10	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
11	SB-1	須恵器	有台盤	22.2	3.7	11.2		45	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	湖西窯産	8世紀	
12	SB-1	須恵器	盤		(1.4)			3	密	良好	灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀	
13	SB-1	須恵器	壺		(2.0)			1	密	良好	淡灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀	
14	SB-1	須恵器	甕		(21.7)			5	密	良好	灰色	内面当て具痕ナデ消し、薄く灰釉をハケ塗り、外面平行タタキ、自然釉・鉄分が沈着	湖西窯産	8世紀	
15	SB-1	土師器	壺	15.8	(3.5)			1	密	良好	茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指オサエ		8世紀	三河型甕(古代)
16	SE-1	須恵器	蓋		(3.4)	20.4		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ・自然釉	湖西窯産	8世紀	
17	SE-1	須恵器	蓋		(3.2)	19.4		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
18	SE-1	須恵器	無台坏	18.2	(5.1)			5	密	良好	灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀	
19	SE-1	須恵器	無台坏	13.8	(3.7)			15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
20	SE-1	須恵器	無台坏		(1.7)	6.2		10	密	やや不良	淡褐色	回転ナデ、底部回転糸切り	湖西窯産	10~11世紀	灰釉併行
21	SE-1	須恵器	無台坏		(1.4)	7.0		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り	湖西窯産	10~11世紀	灰釉併行
22	SE-1	須恵器	無台杯		(1.0)	5.7		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り	湖西窯産	10~11世紀	灰釉併行
23	SE-1	須恵器	有台坏	15.8	5.7	12.0		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	湖西窯産	8世紀	
24	SE-1	須恵器	有台坏		(3.5)	12.8		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部外面下位~底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	湖西窯産	8世紀	
25	SE-1	須恵器	有台坏	16.0	(5.4)			15	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
26	SE-1	須恵器	有台坏	15.3	3.0			5	密	良好	淡灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀	
27	SE-1	須恵器	有台坏		(1.1)	10.1		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	湖西窯産	8世紀	
28	SE-1	須恵器	有台坏		(1.8)	8.9		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	湖西窯産	8世紀	
29	SE-1	須恵器	坏		(3.2)	13.0		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀	
30	SE-1	須恵器	小坏	7.6	3.75	5.2		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、内面に自然釉	湖西窯産	8世紀	
31	SE-1	須恵器	長頸壺		(2.7)	11.0		1	密	良好	淡灰色	回転ナデ、外面に自然釉	湖西窯産	8世紀	
32	SE-1	須恵器	長頸壺		(5.9)			10	密	良好	淡褐色	回転ナデ、内外面に自然釉	湖西窯産	8世紀	
33	SE-1	須恵器	広口壺	25.2	(3.5)			20	密	良好	淡灰色	回転ナデ		6世紀	
34	SE-1	須恵器	長頸壺	24.5	(1.5)			5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、内外面に自然釉	湖西窯産	8世紀	
35	SE-1	須恵器	不明品		(9.4)			-	密	良好	淡灰色	回転ナデ、外面に2条×2段の沈線・櫛の羽状刺突文、内面の口縁部直下に沈線	湖西窯産	8世紀	鉢か?
36	SE-1	須恵器	陶白	24.8	(10.4)			15	密	良好	灰色	回転ナデ、体部内外面とも下位に粗い板ナデ	湖西窯産	8世紀	
37	SE-1	須恵器	甕		(12.1)		頸部径31.8	3	密	良好	淡灰色	回転ナデ、頸部内外面板ナデ、体部外面に自然釉	湖西窯産	8世紀	
38	SE-1	灰釉陶器	碗	14.8	4.6	6.8		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
39	SE-1	灰釉陶器	碗	16.4	5.5	7.4		50	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	小谷窯期	
40	SE-1	灰釉陶器	碗	17.4	(4.3)			5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
41	SE-1	灰釉陶器	碗		(3.7)	8.4		50	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、外面に灰釉	二川窯産	小谷窯期	底部外面に薄く墨書残存

*単位はcmまたはg、()は残存率

No	遺構	種類	器種	口径	器高	底径	その他	残存率%	胎土	焼成	色 調	調整 等	産地	時 期	備 考
42	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.5)	7.3		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
43	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.7)	7.6		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
44	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.9)	6.3		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
45	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.8)	7.3		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
46	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.8)	6.8		15	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内面に灰釉	二川窯産	O-53~H-72	
47	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.0)	6.8		20	密	良好	濃灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
48	SE-1	灰釉陶器	深碗		(3.0)	7.9		40	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内面見込みにヘラ描きの圏線	二川窯産	小谷窯期	
49	SE-1	灰釉陶器	碗		(3.5)	7.4		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、貼り付け高台	二川窯産	小谷窯期	
50	SE-1	灰釉陶器	碗		(2.7)	7.4		40	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	小谷窯期	
51	SE-1	灰釉陶器	碗		(2.6)	7.5		15	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、貼り付け高台	二川窯産	小谷窯期	
52	SE-1	灰釉陶器	碗		(2.6)	7.6		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内面に灰釉	二川窯産	H-72	
53	SE-1	灰釉陶器	碗		(2.5)	6.3		25	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内面に灰釉	二川窯産	H-72	
54	SE-1	灰釉陶器	碗		(2.0)	6.6		30	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
55	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.4)	7.1		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	小谷窯期	
56	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.8)	8.0		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内面に灰釉	二川窯産	O-53~H-72	
57	SE-1	灰釉陶器	碗		(1.7)	7.0		10	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
58	SE-1	灰釉陶器	深碗	15.6	-	7.0		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
59	SE-1	灰釉陶器	深碗	17.6	(4.4)			10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、内面に灰釉	二川窯産	H-72	
60	SE-1	灰釉陶器	深碗		(5.2)			10	密	良好	淡灰色	回転ナデ	二川窯産	H-72	
61	SE-1	灰釉陶器	深碗		(5.2)	8.3		30	やや粗	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、体部外面に灰釉ハケ塗り	二川窯産	小谷窯期	
62	SE-1	灰釉陶器	深碗		(4.5)	7.0		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	H-72	
63	SE-1	灰釉陶器	深碗		(3.8)	8.0		35	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台、内外面に灰釉	二川窯産	小谷窯期	
64	SE-1	灰釉陶器	深碗		(2.6)	10.2		20	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	猿投窯産	H-72	
65	SE-1	灰釉陶器	深碗		(2.7)	6.8		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
66	SE-1	灰釉陶器	深碗		(2.3)	6.6		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
67	SE-1	灰釉陶器	碗		(2.4)	7.8		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
68	SE-1	灰釉陶器	深碗		(2.1)	7.7		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	H-72	内面にスス付着
69	SE-1	灰釉陶器	深碗		(1.9)	6.2		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産		
70	SE-1	灰釉陶器	広口壺	24.9	(10.5)			2	密	良好	淡灰色	回転ナデ、内外面に自然釉			
71	SE-1	灰釉陶器	平瓶		(3.0)	16.5		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台			
72	SE-1	山茶碗	碗	16.2	6.7	7.3		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台、内外面に灰釉	渥美・湖西型	1型式	
73	SE-1	山茶碗	碗		(2.1)	8.2		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	渥美・湖西型		
74	SE-1	山茶碗	碗		(2.7)	7.1		40	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内面に使用痕	渥美・湖西型	1型式	
75	SE-1	山茶碗	碗		(2.1)	7.0		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、内面に重ね焼き痕・自然釉	渥美・湖西型	1型式	底部外面に薄く墨書残存
76	SE-1	山茶碗	小碗	10.7	(2.0)			20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、内外面に自然釉	渥美・湖西型	1型式	
77	SE-1	山茶碗	小碗		(2.3)	4.8		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切りのちナデ、貼り付け高台	渥美・湖西型	1~2型式	
78	SE-1	山茶碗	碗		(1.5)	6.1		10	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	渥美・湖西型	1型式	
79	SE-1	山茶碗	小皿?		(1.4)	6.1		15	密	良好	暗灰褐色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台・モミ痕、内外面に鉄分が付着	渥美・湖西型	2型式	
80	SE-1	山茶碗	壺		(2.2)	6.6		30	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、体部回転糸切り、内面に自然釉			
81	SE-1	山茶碗	二重高台碗		(2.8)	8.1		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部回転糸切り、貼り付け高台、高台上に断面三角形の突帯	渥美・湖西型	1型式	
82	SE-1	土師器	甕	25.6	(2.3)			2	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ			三河型甕(古代)
83	SE-1	土師器	甕		(3.4)			1	密	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面板ナデ		清輝型3	
84	SE-1	土師器	鍋	19.1	(2.6)			1	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ			初期の伊勢型鍋
85	SE-1	土師器	鍋	19.0	(3.5)			3	密	良好	淡褐色	口縁部内面ナデ、外面ヨコナデ			初期の伊勢型鍋
86	SE-1	土師器	鍋	21.1	(5.9)			3	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ			初期の伊勢型鍋
87	SE-1	ガラス製品	不明品	長さ(4.7)、幅(3.4)				-				型作りか	産地不詳		被熱してゆがむ
88	SE-2	灰釉陶器	大碗		(2.6)	11.1		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、体部外面下位回転ヘラケズリ、底部外面ナデ、貼り付け高台、内面に灰釉	二川窯産	O-53~H-72	
89	SE-2	山茶碗	碗		(2.6)	7.4		30	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、ヘラ描きか?、貼り付け高台	渥美・湖西型	1型式	
90	SE-2	陶器	丸皿	10.5	5.6	2.6		20	密	良好	淡褐色	回転ナデ、削込み高台、内面見込みが段になり窪む、内外面に鉄釉	瀬戸・美濃窯産	大窯2~3	
91	SE-2	土師器	鍋	26.5	(6.1)			5	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナデ、指押さえ		戦国~近世	半球形鍋、スス付着
92	SD-1	須恵器	高盤		(7.1)			5	密	良好	淡灰色	回転ナデ	湖西窯産	8世紀?	
93	SK-1	陶器	折縁皿	13.6	2.9	6.7		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台、内外面に灰釉、内面見込みに鉄絵	瀬戸・美濃窯産	登窯期	
94	SK-1	土師器	鍋	23.5	(8.9)			10	密	良好	淡橙褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面上位ナデ・指押さえ、下位ヘラケズリ		近世	半球形鍋、スス付着
95	SK-4	灰釉陶器	碗		(2.6)	6.2		3	密	良好	灰白色	回転ナデ、貼り付け高台	二川窯産	O-53~H-72	
96	SK-4	灰釉陶器	碗		(1.9)	6.6		5	密	良好	淡灰色	回転ナデ、貼り付け高台	二川窯産	H-72	
97	SK-4	陶器	播鉢		(4.9)			1	密	良好	淡褐色	回転ナデ、内外面に鉄釉	瀬戸・美濃窯産	大窯4末	
98	SK-4	土師器	鍋	22.2	(5.4)			5	密	良好	橙褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナデ、指押さえ		近世	半球形鍋、スス付着
99	SK-2	須恵器	無台坏	14.8	(4.6)			15	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	湖西窯産	8世紀	
100	SK-3	瓦	軒丸瓦	径16.6~17.0、厚さ2.3				10	やや粗	良好	淡灰白色	ナデ・板ナデ		17世紀	丸に沢瀉文(水野家家紋)
101	SK-7	須恵器	有台坏	14.0	9.7	3.6		20	密	良好	灰色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台	湖西窯産	8世紀	
102	SK-7	陶器	碗		(1.9)	7.4		3	密	良好	淡褐色	回転ナデ、削り出し高台、透明釉		近世	
103	SK-5	土師器	おとし蓋	15.2	(1.7)			10	密	良好	淡褐色	ヨコナデ		近世	羽無釜に附属か
104	東半表土	灰釉陶器	深碗		(2.4)	7.8		25	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台	二川窯産	小谷窯期	
105	東半表土	金属器	銭貨	径2.4、孔0.7、厚さ0.1、重さ2.7				100							元豊通寶
106	東半表土	金属器	鉄砲玉	径1.2、重さ5.6				95							表面の腐食が著しい

※単位はcmまたはg、()は残存値

第4章 総括

今回の調査は、突発的に実施が決定した豊橋球場の改修工事に伴うものである。豊橋球場は終戦後の昭和23年8月に完成した県内では古い球場で、少年野球や高校野球、草野球、社会人リーグなど、さまざまなかたちで使用されている。戦後復興期の間もないころに造られた施設として、たびたび改修工事を受けているものの施設の老朽化は否めず、改修工事が行われることとなった。スタンドの盛り土には空襲後の瓦礫を使用したといわれていたが、今回の調査でも焼土を含む市街地の瓦礫が大量に出土している。

ところで、付近は中世から近世の吉田城址であると同時に、古代から中世を主体とする飽海遺跡の一部でもある。豊橋公園内が空襲を受けていないこと、さらに野球場の盛り土の保護を受けていたこともあり、遺構の残存状態は比較的良好であった。

今回の調査で特筆されるのは、古代の大型井戸SE-1が検出されたことである。調査区の制約から北側半分しか調査できず、また完掘することもできなかったが、幸いにして奈良時代から平安時代末期にいたる豊富な遺物が出土した。井戸自体はおそらく、11世紀である灰釉陶器H-72号窯期から12世紀の山茶碗1期まで使用されたと考えられ、付近の官衙的遺構の一部と考えられる。

井戸が廃棄される最終段階で多量の遺物が投棄される事例がよく見受けられる。出土遺物の大半は破片のため、廃棄土坑として利用されたと現時点では推定されるが、井戸の廃棄の過程でいかなる思想的な背景があり、こうして埋没直前段階に遺物を集中して廃棄するのかは、単なる廃棄なのかどうか、他例を含めて検討する必要があるだろう。また、出土遺物の中にガラス製品の破片が混入しており、二次比熱により大きく歪んでいた。古代から中世のガラス製品が出土することは極めてまれであり、付近に特異な性質をもった遺構が存在した傍証になる。9～14世紀に付近に存在したとされる、伊勢神宮領の飽海神戸とのかかわりが想起される場所である。

さらに、8世紀の堅穴建物の一部が検出され、SE-1からも同時期の須恵器片が多数出土したことから、付近は奈良時代の遺跡の一部と推察される。今までに行われた吉田城址の調査でも奈良時代の遺構・遺物が確認されており、広域にわたって展開することが明らかである。現時点ではその性質を特定する材料に恵まれていないが、古代の渥美郡衙がこの地にあったとする考えもあり、今後の調査の進展による様相の解明が待たれる。

近世の遺構は調査区が狭小なため、武家屋敷地の構造まで踏み込んで見解を示すことはできないが、幸いにして川毛通に該当する道路遺構が検出され、幕末の増井弥惣右衛門邸の北端に相当することが明らかになった。道路遺構に面した塀の遺構は複数回の建て替えが行われており、施設の老朽化や地震による倒壊などの要因が推定される。武家屋敷地の調査は今後も重ねられていくことと思われるので、区画の位置の把握とともに、区画自体や内部の施設の変化にも注意を向けて、調査成果を評価していく必要があるだろう。

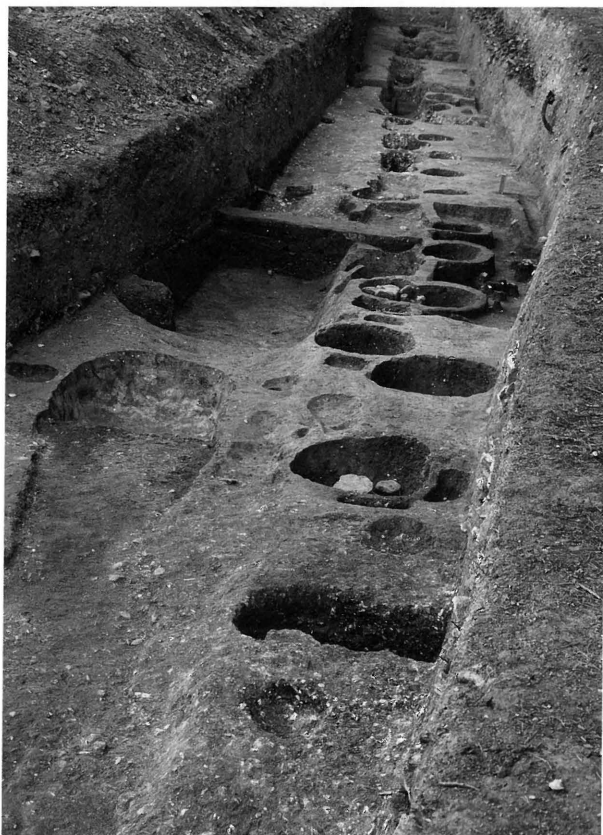
きわめて限られた範囲の、限られた時間内での調査であったが、吉田城址と飽海遺跡に関する重要な知見と、今後の調査の展望を得ることができた。



1. 調査区西側（東から）



2. 調査区東側（西から）



3. SA-1・SD-1（西から）



4. 作業風景（西から）



1. 調査区の位置 (東から)



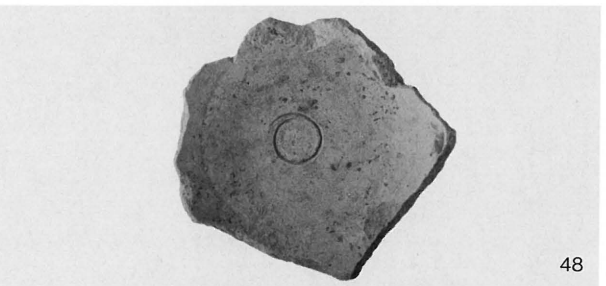
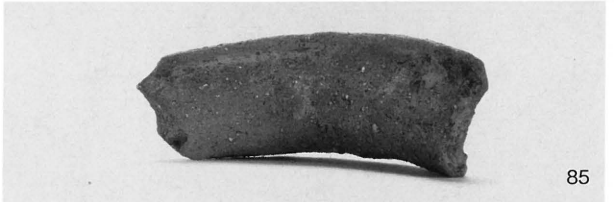
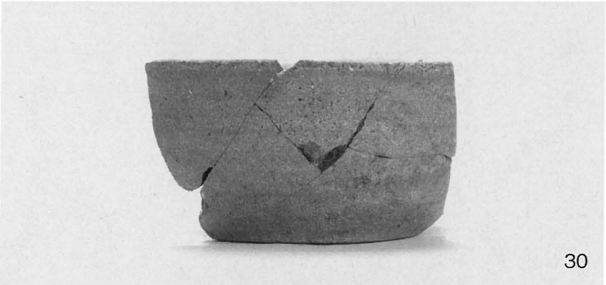
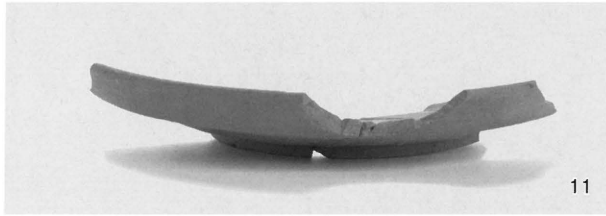
2. SB-1 遺物出土状況 (上から)



1. SE-1土層 (北から)



2. SE-1遺物出土状況 (上から)



出土遺物

よし だ じょう し
吉田城址 第45次

発掘調査

例 言

1. 「吉田城址第45次発掘調査」は、平成25年度に豊橋市役所（事業課・公園緑地課）が事業者となって行った非常用便所排水管設置工事に伴う吉田城址の第45次調査の報告書である。所在地、調査期間・面積及び担当については、下記のとおりである。

- 豊橋市今橋町3番地1 豊橋公園内
- 平成25年11月5日～11月16日 ○45㎡
- 岩原 剛（豊橋市教育委員会美術博物館文化財センター）

目 次

第1章 調査にいたる経過と調査の方法	
1. 調査にいたる経過	53
2. 調査の方法と経過	53
第2章 調査の成果	
1. 遺構	55
2. 遺物	57
3. 総括	59

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (1/2,500)	53	第2図 A区SD-1 平面・断面図 (1/80)	55
第3図 調査区平面・断面図 (1/80)	56	第4図 A区出土遺物 (1/3)	57
第5図 B区出土遺物 (1/3)	58		

表 目 次

表1 文書事務のながれ	54	表2 吉田城址第45次 遺物観察表	60
-------------	----	-------------------	----

写真図版目次

1-1 A区東側-1 (東から)	-2 A区東側-2 (東から)
-3 A区西側-1 (北東から)	-4 A区西側-2 (南西から)
2-1 B区全景-1 (南西から)	-2 B区全景-2 (南から)
-3 A区SE-1-1 (南西から)	-4 A区SE-1-2 (南東から)
-5 出土遺物	

第1章 調査にいたる経過と調査の方法

1. 調査にいたる経過（第1図）

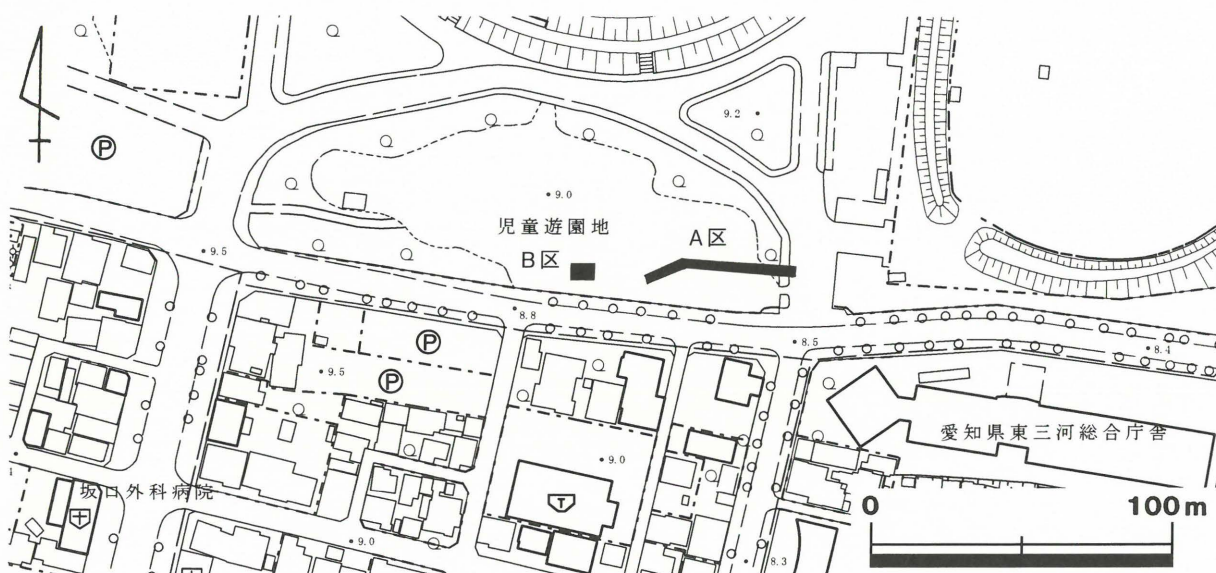
吉田城址は、豊橋市街地にある都市公園「豊橋公園」や豊橋市役所、市立豊城中学校など公共施設の用地に三の丸以内の域の主要部分が存在するほか、豊橋球場や豊橋市陸上競技場および住宅地等は武家屋敷地に該当する。今までに公共施設の建設や住宅の新築・改築に際して、地下の遺構に明らかに影響を与えるものについては事前の発掘調査による記録保存を行ってきた。

第45次調査は、東日本大震災の教訓を受けて、豊橋公園内に災害時の非常用便所を設置するための下水道施設工事に伴い事前に行ったものである。非常用便所の設置は年度当初の予定にはなかった事業であり、豊橋市役所公園緑地課より相談を受けて実施した。下水道施設は豊橋公園の児童遊園地の一角に東西に延びる形で設けられ、掘り方の掘削幅は全体の西側2/3ほどが0.6m、東側が1.2mである。そこで、掘削規模の小さな西側は工事立ち合いとし、東側は記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。なお、西端にはマンホールを設けるが、ここは掘り方の幅が2mを越えることから、発掘調査の対象とした。

2. 調査の方法と経過

発掘調査は、平成25年11月5日～16日に行った。東側部分と西側のマンホール部分は離れているため、前者をA区、後者をB区と命名して調査を進めた。調査面積は45㎡である。

A区は東西に細長く、途中1か所で屈曲している。調査区にあわせて軸を変えながら基準点を設け、調査を進めた。調査で生じた排土は、調査区のすぐ横に仮置きした。遺構の検出面は地山面である。



第1図 調査区位置図（1/2,500）

調査の基本的な流れは下記のとおりである。

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、順次遺物を取り上げる。
3. 業者委託で基準点を設置し、1/20縮尺の平面図を作成する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、個別に遺構写真を撮影する。
5. 脚立等を使用し、調査区の全景写真を撮影する。

なお、調査に伴う文書事務の流れは表1のとおりである。

表1 文書事務の流れ

文書名	文書番号	日付	作成者	提出先
埋蔵文化財発掘の通知について	25豊公園第198号	平成25年9月12日	豊橋市長 佐原光一 (市公園緑地課)	愛知県教育委員会
周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について	25教生第1952号	平成25年10月18日	愛知県教育委員会	豊橋市長 佐原光一 (市公園緑地課)
埋蔵文化財発掘調査の報告について	25豊教美第497号	平成25年12月6日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長
埋蔵文化財の発掘について(受理通知)	25教生第2581号	平成25年12月26日	愛知県教育委員会教育長	豊橋市教育委員会教育長
発掘調査完了報告票	25豊教美第505号	平成25年12月10日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県教育委員会教育長
埋蔵文化財発見・認定通知書	25豊教美第505号	平成25年12月10日	豊橋市教育委員会教育長	愛知県豊橋警察署長

第2章 調査の成果

1. 遺構

調査区はA区が幅1.3～1.4m、長さ27.5mを測る長細い形状で、B区が2m四方の正方形である。A区は排水管、B区はマンホールの掘方に相当する。小規模な調査区のため、遺構間の脈絡を見出すことは難しいが、大半は近世の武家屋敷地に伴う遺構である。なお、第45次調査区付近は幕末には少祿の藩士たちが居住した地域である。

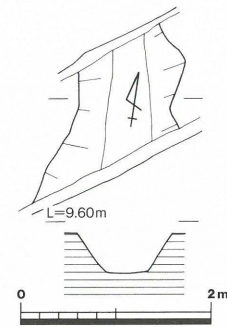
遺物が出土したおもな遺構には、溝、井戸および性格不明遺構や遺物包含層があり、これをおもに説明する。

A. 溝（第2・3図）

A区SD-1

A区の西端付近で検出され、北・南側は調査区外となる。およそ南北方向に延びる溝と考えられ、規模は検出された長さ2.0m、幅最大1.2m、深さ0.4mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色砂質土である。恐らく屋敷境の区画溝と考えられる。

出土遺物には銭貨の寛永通寶（第4図1）があり、遺構の時期は近世である。



第2図 A区SD-1
平面・断面図(1/80)

B. 井戸（第3図）

A区SE-1

A区の東端、既設の雨水排水溝を残して調査区を設けたところに存在し、北側は調査区外で、全体の1/3ほどが検出されたに過ぎない。平面形は円形と考えられ、直径は1.5m以上である。埋土は暗灰褐色砂質土である。未完掘であり、深さ1mほどのところで掘削をやめている。

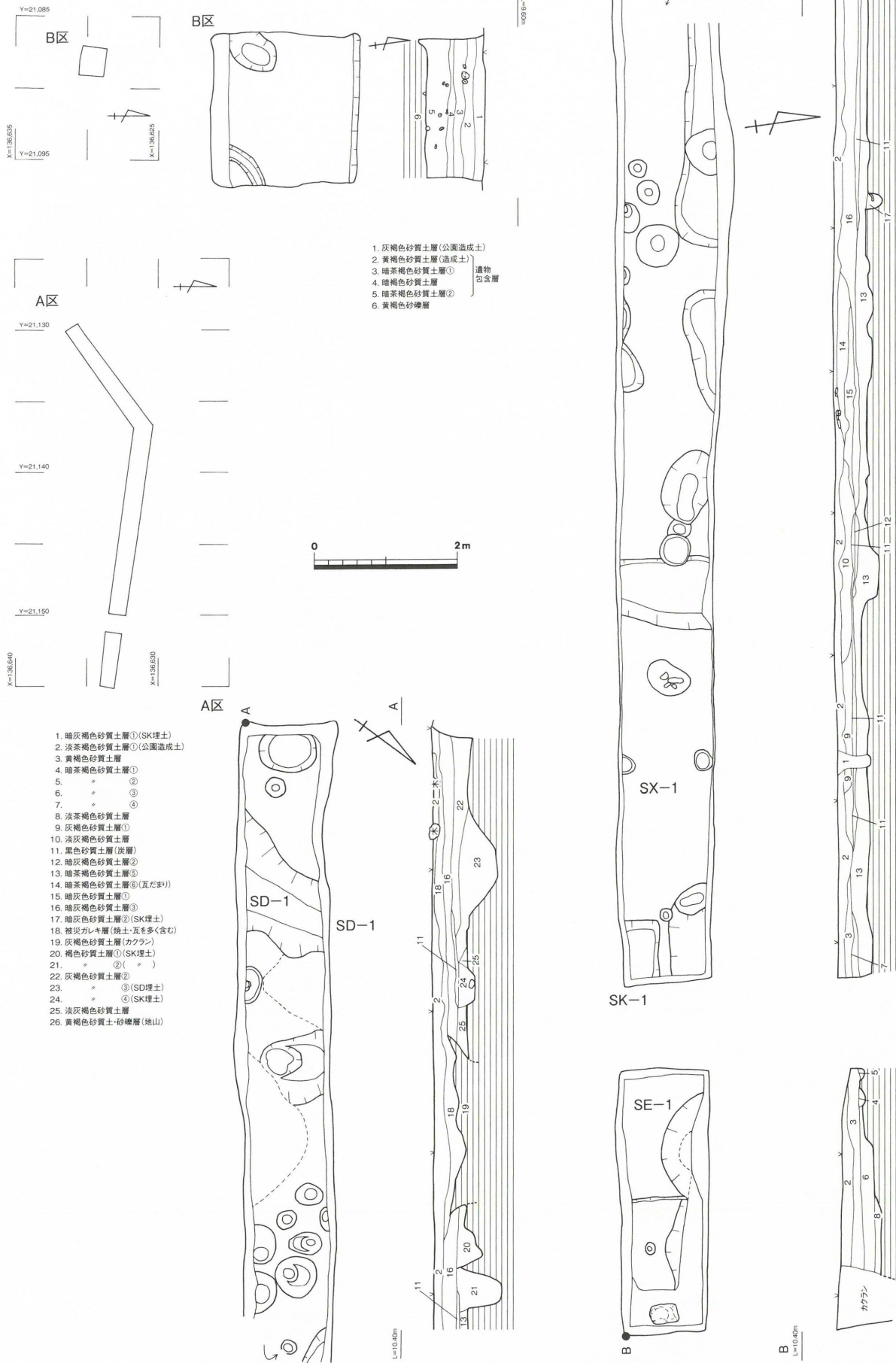
出土遺物には瀬戸美濃窯産陶器の鉢（第4図2）、土師器の皿（3）、半球形鍋（4・5）があり、遺構の時期は近世である。

C. 不明遺構・遺物包含層（第3図）

A区SX-1

A区SE-1の西側にあたる場所で、地山上にあつて広く分布する暗茶褐色砂質土層（13層）の上に、地山質の黄褐色砂質土層（3層）及び暗茶褐色砂質土層（7層）があり、意図的な整地を行った痕跡と推定された。この整地層からは遺物がまとまって出土しているため、これを性格不明の遺構SX-1とした。遺構の正確な範囲は明らかにはできない。

出土遺物には瀬戸美濃窯産陶器の輪禿皿（第4図7）、挿鉢（8）、肥前産磁器の染付皿（9）、土師



第3図 調査区平面・断面図 (1/80)

器の半球形鍋（6）・皿（10・11）があり、遺構の時期は近世前期（17世紀）と考えられる。

B区遺物包含層

B区は表土の下から地山の間には4層が存在しており、ここから多数の遺物が出土している。地山の標高はA区よりも1m以上低いことから、B区全体を含むような大型土坑がここに存在するものと考えられ、土層は大型土坑内の埋土の堆積状況を示すのだろう。

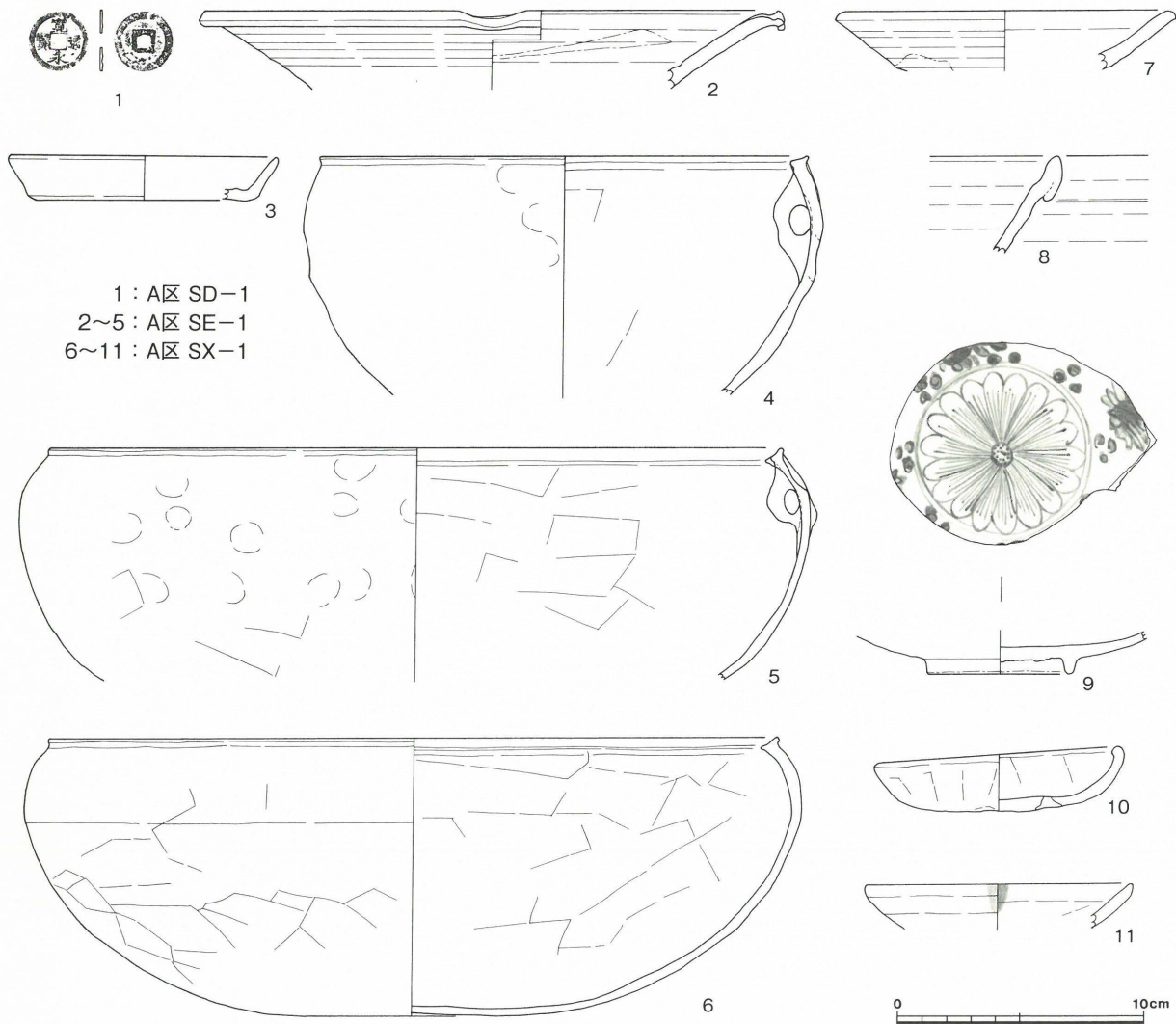
出土遺物は多く、陶器（第5図1～24）、土師器の皿（25）、磁器（26～30）、瓦（31）があり、遺構の時期は近世後期（19世紀）と考えられる。恐らく廃棄土坑であろう。

1. 遺物

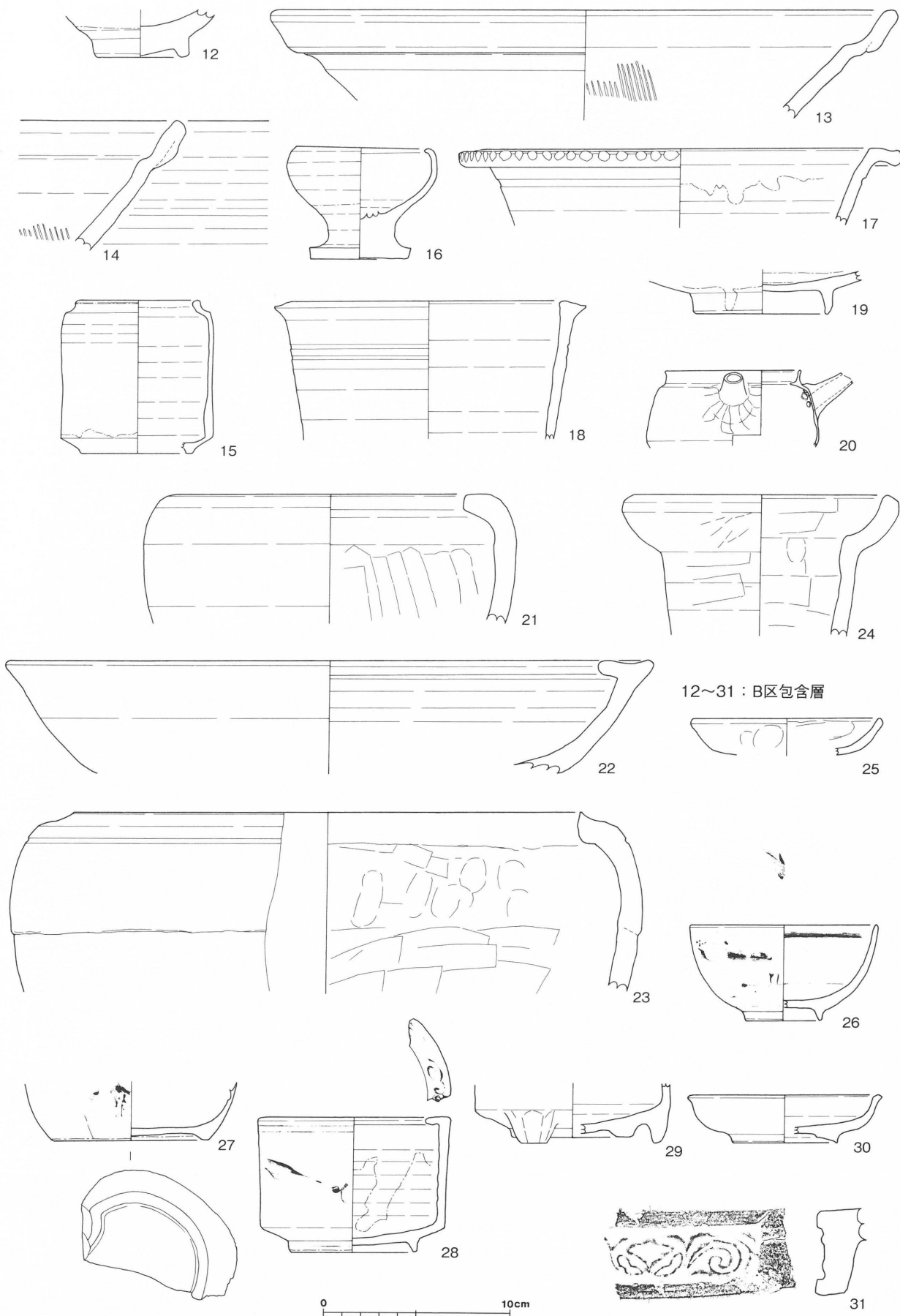
A. 溝

A区SD-1（第4図1）

1は銭貨の寛永通寶である。



第4図 A区出土遺物（1/3）



第5図 B区出土遺物 (1/3)

A区SE-1（第4図2～5）

2は瀬戸・美濃窯産陶器の鉢である。全体に灰釉が施され、口縁部の一部をゆがめて片口にする。3～5は土師器である。3は皿で、口縁部を強くヨコナデする。4・5は半球形鍋で、口縁端部は4が外側に、5が内・外側に肥厚する。

A区SX-1（第4図6～11）

6・10・11は土師器である。6は半球形鍋で、口縁端部は内外側に肥厚する。10・11は皿で、10は手づくね成形され底部に外側からの穿孔が1か所見られる。11は水平方向に板ナデされており、ロクロ成形の可能性がある。口縁部の1か所にススが付着しており、燈明皿として使用されたものである。

7・8は瀬戸・美濃窯産陶器である。7は輪禿皿で、内外面には灰釉が掛かる。登窯第4小期のもの。8は播鉢で、口縁部は外側に折り返して口縁帯を形成する。登窯第5小期のもの。9は肥前産磁器の染付皿で、内面の見込みには菊花文がある。

B区遺物包含層（第5図12～31）

12～24は陶器で、このうち12～18は瀬戸・美濃窯産、19・20は産地不詳、21～24は常滑窯産である。

12は丸碗の底部付近で削出し高台となり、体部は鉄釉が掛かる。登窯第4小期のもの。13・14は播鉢で、口縁部を外側に折り曲げて口縁帯を形成する。いずれも登窯第6小期。15は汁次で、内外面に濁った灰釉が掛かる。登窯第11小期。16は乗燭で、いわゆる「たんころ」である。内外面に鉄釉が掛かる。登窯第9小期。17は植木鉢で、口縁端部には連続した棒状工具による押圧が見られる。鉄釉を刷毛塗りした後銅緑釉が掛かる。18は鉄釉の半胴甕で、口縁端部を外側に引き出す。

19は内面の灰釉を環状にはぎ取った輪禿皿である。20は煎茶に用いた炆器質の急須である。

21・22は火鉢で、21は外面に降灰しており堅緻に焼成されるのに対し、22は軟質に焼き上げられている。23は口縁部から体部にかけて切り込みが入った「くど」である。24は土樋である。

25は土師器の手づくね成形された皿で、外面には指頭圧痕が顕著である。

26～30は肥前産の磁器である。26～28は染付で、26は碗、27は型打皿、28は香炉。29・30は青磁で29は三足が付き、30は端反となる皿で蛇の目高台である。

31は軒平瓦である。瓦当には複線による唐草文と中心飾りの花文が見られる。

3. 総括

調査区は形状が変則的で、遺構間の脈絡も見出しにくいものだが、おもに近世の遺構を検出することができた。近年は周辺部の調査が進み、吉田城の東部付近の武家屋敷地の様相が明らかになりつつある中で、本調査区も様相把握をさらに助長する成果を得ることができた。

一方でほかの地域で確認された古代・中世の遺構はほとんど認められず、当該期の遺構の広がりを考えるうえで知見のひとつとなりうる。

表2 吉田城址第45次 遺物観察表

No.	地区名	遺構	種類	器種	口径	器高	底径	その他	残存率%	胎土	焼成	色調	調整等	産地	時期	備考	
1	A区	SD-1	銭貨	寛永通寶	径2.5、厚さ0.1、孔径0.6、重さ3.3				100							近世	
2	A区	SE-1	陶器	鉢	24.0	(3.2)			5	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、灰釉	瀬戸・美濃窯産	近世		
3	A区	SE-1	土師器	皿	11.0	1.8	8.4		20	密	良好	橙褐色	口縁部ヨコナデ、底部内外面ナデ		近世		
4	A区	SE-1	土師器	半球形鍋	20.0	(9.8)			5	密	良好	橙褐色	口縁端部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面指押さえのちナデ		近世	スス付着	
5	A区	SX-1	土師器	半球形鍋	30.2	(9.6)			20	密	良好	茶褐色	口縁端部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面上半指押さえのちナデ、下半ヘラケズリ		近世		
6	A区	SX-1	土師器	鍋	30.0	11.5			25	密	(やや)不良	橙褐色	口縁端部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面上半指押さえのちナデ、下半ヘラケズリ・板ナデ		近世	スス付着	
7	A区	SX-1	陶器	輪弁皿	14.0	(2.4)			10	密	良好	淡褐色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、灰釉	瀬戸・美濃窯産	登窯第4小期		
8	A区	SX-1	陶器	播鉢		(4.0)			1	密	良好	淡橙褐色	回転ナデ、鉄釉	瀬戸・美濃窯産	登窯第5小期		
9	A区	SX-1	磁器	皿		(1.8)	6.0		20	密	良好	白色	透明釉	肥前産			
10	A区	SX-1	土師器	皿	10.2	2.7			95	密	良好	淡褐色	口縁端部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面指押さえ・板ナデ			底部に焼成後穿孔	
11	A区	SX-1	土師器	皿	10.9	(1.8)			5	密	良好	橙褐色	横方向の板ナデ、あるいは回転ナデか			口縁部1か所にススが付着。燈明皿	
12	B区	包含層	陶器	丸碗		(2.4)	5.1		40	密	良好	淡褐色	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、鉄釉	瀬戸・美濃窯産	登窯第4小期		
13	B区	包含層	陶器	播鉢	34.0	(5.9)			3	密	良好	淡褐色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、鉄釉	瀬戸・美濃窯産	登窯第6小期		
14	B区	包含層	陶器	播鉢		(7.0)			5	密	良好	淡褐色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、鉄釉	瀬戸・美濃窯産	登窯第6小期		
15	B区	包含層	陶器	汁次	6.7	8.3	6.0		20	密	良好	淡灰色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ後回転ナデ	瀬戸・美濃窯産	登窯第11小期		
16	B区	包含層	陶器	乗燭	7.2	6.1	5.2		80	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、底部外面回転糸切り、鉄釉	瀬戸・美濃窯産	登窯第9小期		
17	B区	包含層	陶器	植木鉢	24.0	(4.2)			2	密	良好	淡灰褐色	回転ナデ、口縁端部に連続する棒状工具の押圧、鉄釉刷毛塗りのち銅緑釉	瀬戸・美濃窯産			
18	B区	包含層	陶器	半胴甕	16.8	(7.5)			5	密	良好	橙褐色	回転ナデ、外面下半回転ヘラケズリ	瀬戸・美濃窯産	登窯第8小期		
19	B区	包含層	陶器	輪弁皿		(2.3)	7.4		50	密	良好	灰色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、鉄釉灰釉	産地不詳			
20	B区	包含層	陶器	急須	7.3	(4.2)			20	密	良好	淡褐色	回転ナデ、注口部貼付け	産地不詳			
21	B区	包含層	陶器	火鉢	17.6	(7.0)			5	密	良好	赤褐色	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデ、内面縦方向のナデ	常滑窯産	19世紀		
22	B区	包含層	陶器	火鉢	35.0	(6.1)			5	密	(やや)不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	常滑窯産			
23	B区	包含層	陶器	くじ	27.4	(9.8)			5	密	良好	橙色	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・肩に1条の沈線、内面指押さえ・板ナデ	常滑窯産	17世紀		
24	B区	包含層	陶器	土壺	14.9	(7.7)			10	密	良好	橙褐色	ヨコナデ・板ナデ	常滑窯産	19世紀		
25	B区	包含層	土師器	皿	10.4	(2.0)			10	密	良好	淡褐色	口縁端部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面指押さえ				
26	B区	包含層	磁器	碗	10.2	5.2	4.2		50	密	良好	淡灰白色	透明釉	肥前産		染付	
27	B区	包含層	磁器	型打皿		(3.1)	8.6		50	密	良好	淡灰白色	透明釉	肥前産		染付	
28	B区	包含層	磁器	香炉	10.4	7.4	6.8		40	密	良好	淡灰白色	透明釉	肥前産		染付	
29	B区	包含層	磁器	香炉		(3.2)	10.5		10	密	良好	淡灰白色	青磁釉	肥前産		青磁	
30	B区	包含層	磁器	皿	10.4	2.6	5.6		45	密	良好	淡灰白色	青磁釉	肥前産		青磁	
31	B区	包含層	瓦	軒平瓦	高さ(4.7)、長さ(2.6)				5	密	良好	灰色	ナデ				

※単位はcmまたはg、()は残存値



1. A区東側-1 (東から)



2. A区東側-2 (東から)



3. A区西側-1 (北東から)



4. A区西側-2 (南西から)



1. B区全景-1 (南西から)



2. B区全景-2 (南から)



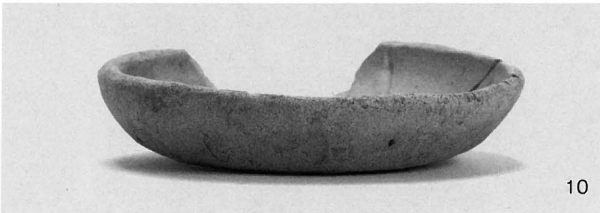
3. A区SE-1-1 (南西から)



4. A区SE-1-2 (南東から)



9



10



20



16



26

5. 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しないまいぞうぶんかざいはくつちょうさ3							
書名	市内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ							
副書名								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第139集							
編著者名	岩原 剛							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0897 豊橋市松葉町三丁目1番地 豊橋市文化財センター TEL0532-56-6060							
発行年月日	2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はやしいせき 林遺跡 (第1次)	とよはしし 豊橋市 ひがしわきいっちょうめ 東脇一丁目 ちない 地内	23201	790459	34度 45分 10秒	137度 22分 10秒	20130612～ 0712 20131015～ 1103	370	記録保存 調査
よしだじょうし 吉田城址 (第42次)	とよはしし 豊橋市 いまはしちよう ばんち 今橋町4番地	23201	790393	34度 46分 0秒	137度 23分 55秒	20121001～ 1019	100	記録保存 調査
よしだじょうし 吉田城址 (第45次)	とよはしし 豊橋市 いまはしちよう ばんち 今橋町3番地1	23201	790393	34度 46分 0秒	137度 24分 0秒	20131105～ 1116	45	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
はやしいせき 林遺跡 (第1次)	集落	古代 近世	埋没谷、土坑墓 区画溝	須恵器、灰釉陶器、土 師器、鉄製紡錘車 土師器		林遺跡は平安時代の 集落遺跡と考えられる が、調査区の大半は 当時の埋没谷であっ た。吉田城址第42次 調査では平安時代の 井戸が検出され、同 第45次調査では武家 屋敷地の一部が確認 された。		
よしだじょうし 吉田城址 (第42次)	城址	古代 近世	井戸、竪穴建物跡 区画溝、塀跡、土坑 廃棄土坑	須恵器、灰釉陶器 陶器、磁器、土師器				
よしだじょうし 吉田城址 (第45次)	城址	近世	区画溝、井戸、土坑	陶器、磁器、土師器				
要 約	<p>林遺跡は平安時代の集落跡と考えられるが、調査区の大半は当時の埋没谷であった。埋没谷は幅が調査区内で最大7.5m、深さは1.2mを測る。出土遺物は須恵器、灰釉陶器、山茶碗、土師器など古代を中心に認められ、細片が多く、いずれも周辺から流れ込んだものと考えられる。また、埋没谷の南東側で10世紀後葉～11世紀前葉の土坑墓が検出され、副葬品として灰釉陶器の碗・皿・壺、刀子、鉄製紡錘車のほか、木棺に使用された鉄釘が出土した。</p> <p>吉田城址第42次調査では平安時代の井戸が検出され、内部から大量の遺物が出土した。付近は古代の郡衙跡に比定される飽海遺跡でもあり、中でも二次被熱したガラス製品は、遺跡の性格を考えるうえでも注意される。このほか、近世の武家屋敷地を区画する溝や塀跡が確認されている。</p> <p>吉田城址第45次調査では、井戸や区画溝など武家屋敷地の遺構の一部が確認された。</p>							

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第139集

市内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ

2016年3月25日

発行 豊橋市教育委員会◎
教育部美術博物館（文化財センター）
〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 共和印刷株式会社